

一樹あり

ひらた編集部



希望の道

人それぞれに道を歩む
多感な若き日を

働きかつ学ぶ

道ははるか遠くけわしくも
心に誓った希望の道を

つかれた我が身をはげまして

ゆるむ心を引きしめて

道 道 一すじの道を

歩み続ける

希望の道を歩み続ける

昭和一二年六月、現社長、平田次二個人によって創業された当社は、本年六月、満三五年を迎えた。たまたま本年三月一〇日より約一ヶ月半に渡って、著述家市原鶏也先生の筆によって社長の伝記が日本工業新聞に連載されたのを機会に、当社の社史ともいえるこの記事を、皆さんにもご紹介しようと思い、編集部にて若干筆を加へ、市原先生および日本工業新聞社のご好意により、ここに転載しました。

尚、社長個人の苦闘の生立ちを今ここに省みて、その人間の欲望に対する自制、仕事に対する努力や愛情、自己に対しての正直など、我々の生活の指針にするところが多いと思います。

満六一歳を迎えら

れて益々意気軒昂、

悠に若者を凌ぐもの

あり、この上とも健

康と長寿を祈るとと

もに、高所より卓越

せる見通しで、会社

の方針をたて、激動

する世界経済を乗切

り、日本はおろか、世

界的バルブ企業に成

長発展すること、

全社員と共に切望す

る次第であります。

昭和四七年六月

社内報編集部

表彰状

平田次二殿

あなたは多年にわたり輸出の

振興に尽力し顕著な功績を

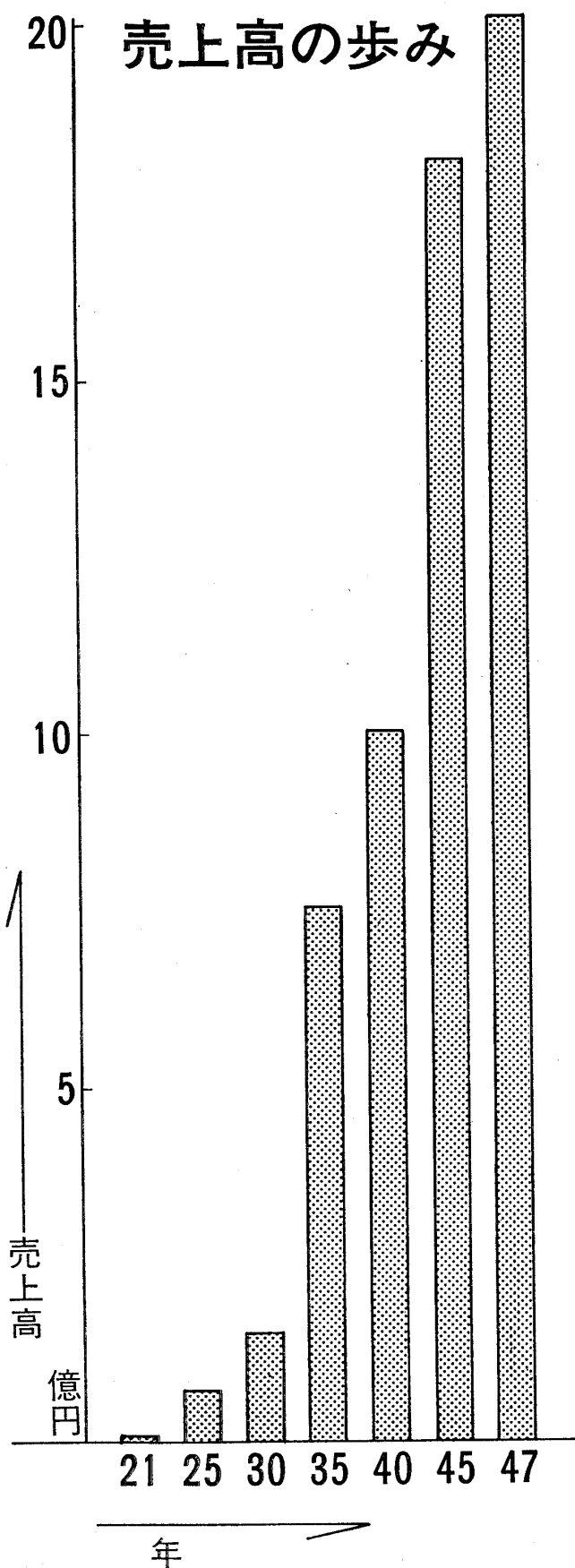
あげられました。

よつてここに表彰します

昭和四六年六月二十八日

内閣総理大臣 佐々栄作

平田バルブ工業株式会社年表



- 昭和12年 現社長、港区東新橋に「平田商店」を創業
- 14年 平田商店、株式会社へ改組、資本金19万5千円
- 16年 ㈱平田商店を「平田バルブ工業株式会社」へ社名変更
- 19年 ㈱平田バルブ製作所を設立
- 20年 空襲により、平田バルブ工業、平田バルブ製作所とも焼失、世田谷区駒沢の社長自宅へ移転
- 22年 ㈱平田バルブ製作所を「平田産業株式会社」へ社名変更
- 23年 アルゼンチンへ初輸出。港区西新橋、兼房ビルに「新橋出張所」開設。資本金300万円へ増資
- 24年 港区新橋に本社、新築。新橋出張所閉鎖
- 26年 日本ステンレス㈱と業務提携を結び、ステンレスバルブ製造開始
- 27年 J I S 認定工場となる
- 28年 資本金350万円へ増資
- 32年 川崎市高津区に川崎工場建設着手
- 33年 川崎工場、テスト場完成。日本産業巡航見本市船「アトラス丸」に初出展
- 34年 川崎工場、機械場、変電所完成。傍系会社「日本バルブ輸出振興株式会社」設立
- 35年 川崎工場、倉庫、研究室、宿舍、会議室完成。資本金700万円へ増資
- 38年 大阪市北区梅田町に「大阪出張所」開設。資本金1,050万円へ増資
- 39年 酸素用バルブ製造開始
- 40年 英国、ダビソン商会と代理店契約結び、英国との大口契約相次ぐ。資本金1,197万円へ増資
- 41年 輸出貢献企業認定。A P I 表示認可。資本金1,500万円へ増資
- 42年 輸出貢献企業認定。創立30周年を記して川崎工場技術センター完成
L N G バルブ製造開始。大阪出張所、大阪市北区曾根崎へ移転
- 43年 輸出貢献企業認定。G E 認定工場となり、原子力バルブ製造開始
- 44年 輸出貢献企業認定。英文総合カタログ完成
- 45年 輸出貢献企業認定。高圧ガス設備試験製造認定。資本金1,800万円へ増資
- 46年 輸出貢献企業認定。社長、内閣総理大臣より輸出振興功労者として表彰、及藍綬褒章を受ける

ゆるぎない地位

海外でも評価は高い

昭和十二年に創業

平田バルブは昭和十二年六月、平田次二個人によって創業された戦前派。いらい今日までの三十数年間、ステンレス、鍛鋼、ハステロイ、モネル、特殊合金鋼、チタン、鋳鋼等の超高温高压、極低温、強耐酸耐蝕性の「エネルギー」、重化学工業用バルブ」の設計・製造・販売をつづけてきた。現在は年商二十億円にのぼっている。

バルブとは「弁」である。この弁の機能と構造は多種多様で枚挙にいとまがない。その中でも主なものとしては玉形弁、ニードル弁、バタフライ弁、仕切り弁、止め弁、逆止弁などがある。

これらが管路の途中や管端などに結合され、中を通る流体の流量などを制御する。工業産品としては地味な存在ではあるが、その用途はきわめて広く、また重要でもある。

たとえば原子力、火力発電、酸素、石油精製、石油化学、LNG・LPGガス、鉄鋼、肥料、製紙、繊維、機械、造船、プラント建設など、いずれもバルブを欠くことはできない。したがって、一

個あるいは数個といった注文も多く、それだけに特殊な技術が要請されている。

平田バルブがこれまでに生産した特殊バルブは五万件をこえている。そのいずれもが異なった性能を持つもので、設計された五万枚余の図面はそのままデータとして蓄積されている。バルブ業界の老舗といわれるゆえんだ。

平田バルブが自社製品をひっさげて、海外進出をとげたのは、戦後間もないことである。それまでバルブの輸出は困難なものとしていた。その厚いカベを破ったことが、平田バルブの発展につながった。

いまでは東南アジア、中近東、アメリカ、欧州の諸国をはじめとしてソ連、キューバなどの共産圏諸国にも相当な実績をもち、そのほかカナダ、中南米、東欧など三十数カ国からも活発な引き合いがある。いうならば平田バルブの知名度は、海外において高い。

一例をあげると、世界の大企業といわれるG・Eはじめシエル石油、エッソ、あるいはベクトル社、フロア・インタナショナル社など八十数社のうち、約五十社とは直接取り引き、残る三十数社か

らはお名指しで注文がくるほどである。同社が毎年、通産省から「輸出貢献企業」の認定をうけているのも故なしとしない。

昭和三十三年には川崎市溝ノ口駅前に四〇〇〇平方メートルの工場が完成し、諸施設の完備された技術センターでは、

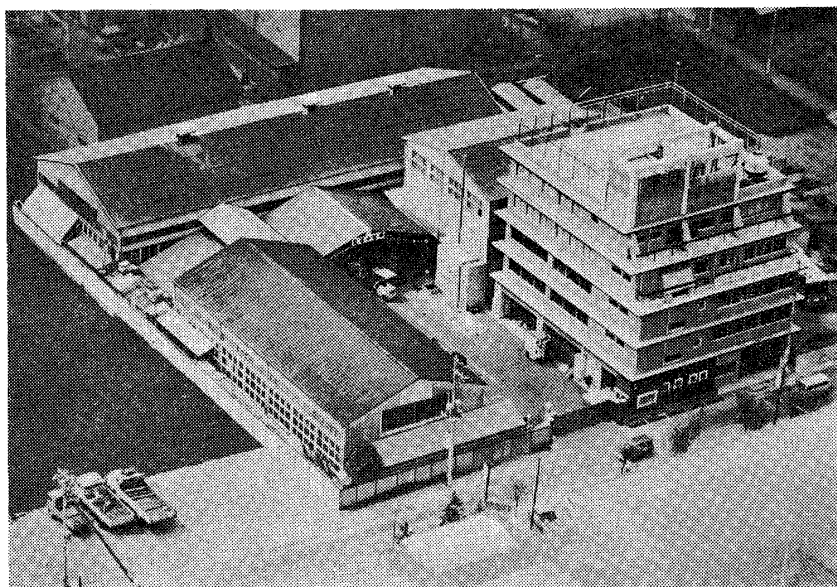
われている。

生産施設の発達にともなって、バルブの性能もきびしい要請をうける。その根源は超高温高压あるいは極低温・耐酸にたえる素材の研究であらう。この点、平田バルブは日本ステンレス、ワシノ機械などと共同研究を重ねて万全を期している。

以上が同業二千数社の中にあって、ゆるぎないトップグループの地位を占めている平田バルブの現況である。

さて、創業者平田次二は岐阜県山県郡桜尾村に現在在町村合併の結果高富町Ⅱの産である。平田バルブを興したときは徒手空拳、誰の援助もうけていない。古めかしい表現をもってすれば、立志伝中の人といえる。

生家は小農。明治四十四年六月、四男一女の長男として生まれた。一女は姉である。その姉は岐阜市内に嫁し、現在は次男・勝が故郷で家を継いでいる。三男・知重は昭和二十六年に、軍隊時代の栄養失調症がたつて病歿、四男・義晃は平田バルブ川崎工場長として、社長である兄をたすけている。



同社の主力・溝ノ口工場

学校では生徒代表

小学三年、郷里に戻る

三歳で北海道に渡る

平田次二がようやく三歳のころ、一家は北海道の帯広に渡って開拓農家となった。このとき、岐阜の桜尾村からは十世帯の農家が行をともししている。あまり豊かな村落ではなかったらしい。

北海道はまだ開墾時代であった。そのため明治四十一年には「北海道国有未開地処分法」が公布され、一定期間内に開墾をなすものには土地払い下げ、また、自作農を目的とする移住民には、成功後に付与するという条件で、土地の無償貸し付けが行なわれた。

内地の農民にとっては、それが魅力であったわけである。平田の一家は政府から五町歩をもらった。こうした開拓農民のくらしがはじまる。

北海道の冬の寒さは「しびれる」といって手にもったハシを思わず落とすほどである。ことに帯広はきびしい。ことしの二月のすえ、日本全土は「出遅れ冬將軍」に見舞われた。この日の朝の冷え込みは、東京の都心や名古屋、鹿児島で零度、東京郊外の八王子市で零下三・五度、軽井沢で零下一〇度、北海道帯広では零

下一八度までさがっている。それほどに寒いところ。

どこをむいても野っ原ばかり。原野に原野がつづいて、大地は沈黙していた。父の米作は材木を伐り集めて、丸太小屋を建てた。一家の者はその片隅に寝た。夜中に吹雪いて目をさますと、夜具のすそに雪が白く光って見えた。

土地はやせていた。遠くから肥えた土を運んで客土するほかはない。そこへ食用としてトウモロコシやカボチャを植えた。だが、収穫期になるとよくクマにやられた。

常食はキビとムギ。それにウサギやキノコあるいはマスを塩づけして栄養源とした。季節になると、溝ほどに細い十勝川の支流にもサケがのぼってきた。その卵をたべにヤマメ（帯広地方ではヤマメと呼んでいた）もついてくる。友達のない少年次二は、それらの魚を追って遊んだ。

やがて彼も小学校三年生となった。荒地との格闘に汁を流す年ごろにまで成長したわけだが、この年に彼は単身郷里に戻り、桜尾小学校に転入している。在村していた祖父母の懇請によるものであつた。

さびしいからといって、呼び戻された彼であつたが、祖父母のしつけは甘くはなかつた。少年の腰が痛くなるほど、田植えも手つだい、炎天下に田の草取りもやつた。そして秋には頬をさされながら刈り入れにも精を出した。

い。六角型の柱時計が十時を告げると、ようやく許されて寝た。こうした精進のおかげで、学校の成績は抜群であつた。小学校三年生で転校いらい高等科を卒業するまで生徒代表を続けたほどである。

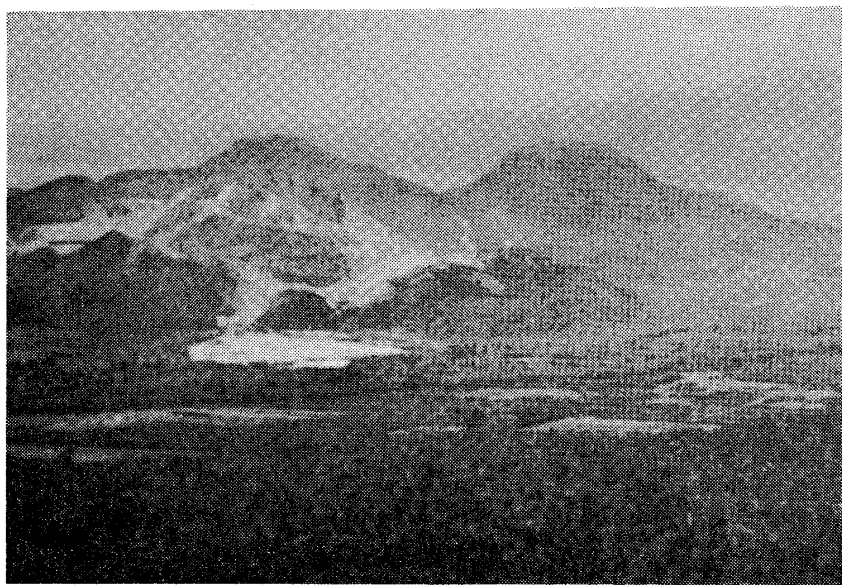
校塔に鳩多き日や卒業す 草田男

学校の担任教師は、彼の成績を惜しんでしきりに進学をすすめた。だが、父と離れている家庭の環境はそれを許さなかつた。

次二は大きな麦ワラ帽子をかぶって、野良に働く男となった。だが、このままいなかに埋もれて百姓にはなりたくない。それが本心であつた。そのかわきをいやすために、高士傑人の伝記をむさぼり読んだ。いなかでは購読する人もすくない経済雑誌「実業之日本」も彼にとっては大きな慰めであつた。

「東京へ出たい」

次二のおもいは募るばかり。やがて、卒業してから一年が過ぎた。昭和三年である。その年に待望の父が北海道から引き揚げてきた。



雄大な北海道

昼間の労働で、夜は食事が済むと眠くなる。学校の宿題を片づけるだけでも辛かったが、炉端で祖父の目がジロリと光っているのを、怠けるわけにはいかな

懐には12円50銭

新聞配達からスタート

父を説得東京へ

次二は戻ってきた父・米作に、さっそく上京の希望を訴えた。しかし、彼が平田家を継ぐべき長男であったから、父は首をたてに振ってはくれない。そのうえ祖父母までが反対であった。

農村では春になると畦を焼く。害虫駆除のために枯草を焼き払う農作業の一つである。明かるい日ざしの中に、火の色は見えないほどにちろちろと燃え移ってゆき、焼けたあとの焦げ臭い匂いに、生あたたかい風が吹いて、いかにも春らしい感じがする。

次二はその炎をうつろに見守りながら、まだ見ぬ大都会東京のことを想う。無口な性格がいっそう無口になった。うつうつとして、たのしまないのである。

祖父母も父もそれが気になった。頭がよくて感じ易い年ごろでもあったから、なおのことである。ついに親族会議をひらくことになった。頑迷固陋といえ言

い過ぎになるが、親族の中には彼の上京をてっぺんから反対する者もいて、話し合いは深夜にまで及んだ。

がせることにして決着がつき、集まった親族たちがそれぞれの家にかえる頃には、晩春のおぼろの月もかなり傾いていた。

次二の胸はふくらんだ。これであこがれの東京へ行ける。明日にも飛んでゆきたかったが、猫の手も借りたいという田植えの時期を目の前にしては、そうもいかない。彼は最後の田植えを済ませてから上京した。

そのとき、次二のふところには、十二円五十銭のカネしかなかった。念願の東京へ出るために、貯金しておいたものである。そのころの十二円五十銭は果たしてどれくらい価値があったものか、いまとなつてはその感覚がつかめない。

こころみにその頃の物価を調べてみると、岩波文庫が星一つにつき二十銭、出版界を震撼させた世界文学全集が一円、タクシーは東京の市内均一で一円が相場とされていたために「円タク」と呼ばれた。

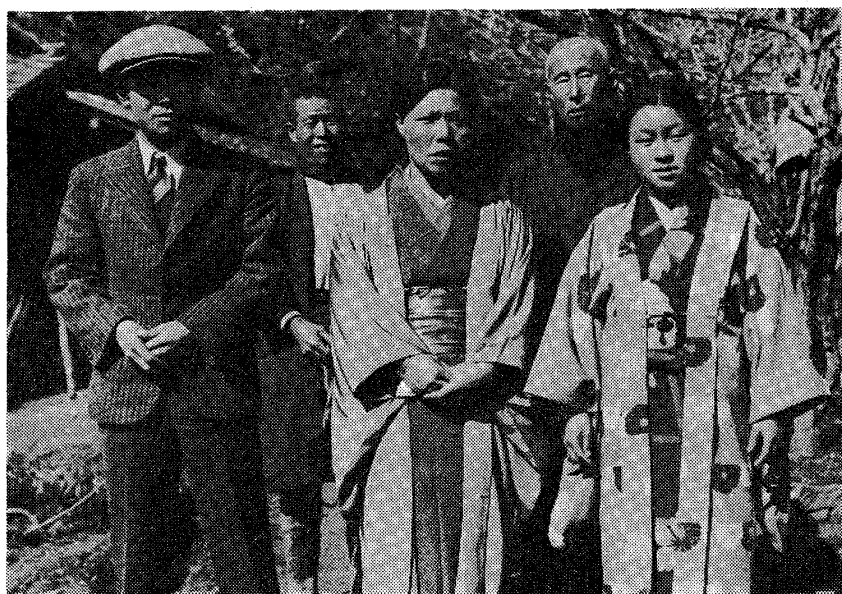
新橋で芸者を二時間あげると六円六十銭、遊廓吉原のオールナイト（泊まり）が三円十円、マネキン嬢の日当が八円パスガールの初任給が九十六銭、女工の

日給はだいたい六十銭とされていた。

また、駄菓子屋で商う芋ようかん、むしようかん、水ようかん、みそまつ、ねじりん棒、とんかち、ソースせんべい、鬼かりんと、のしいか、鉄砲玉（飴玉）金花糖、ぼんぼんなどは仕入れが一個六厘で、一銭売りとなっている。

東京には頼りになる知人がいたわけはない。わずかに一人、祖父の兄弟の息子が墨田区吾嬬町にいただけであった。この人は三共製菓の向島工場に勤めていたが、あまり豊かであるとはいえなかった。

ここに二晩だけ世話になったのち、次



後年徴兵検査のため故郷を訪れた（左端）

二は時事新報寺島販売店へ新聞配達として住み込むことになる。当時、手軽なアルバイトといえば納豆を売り歩くか、豆腐屋の売り子になるか、あるいは牛乳配達人か新聞くばりぐらいのものであった。

時事新報の寺島販売店には同じような仲間が十四、五人いたが、いずれも苦学生であった。朝刊は朝四時に起きて、二百部ほど配った。社名入りの肩だすきをかけ、左手に新聞の束を抱え、右手で抜きとってはピュッと紙を鳴らし、お得意先の玄関に投げこむ。ときにはごっそり新聞束をぬか

ざっと以上のような時代の十二円五十銭であったから、つましく生活すれば一カ月を過ごすことができたであろう。それにしても心細いことであった。

るみの中へ落とし、店主から大目玉を食うこともあった。自転車はまだ貴重なものとされていたので、足で走るよりほかはなかった。

見習い店員で勤務

大八車には苦勞する

大石商店に住み込み

平田次二は新聞配達をしながら、夜は神田の正則英語学校へ通った。田舎出であつたから英語が皆目わからない。その劣等感を除くためであつた。

はじめは六カ月で卒業できる速成科に入學したが、その課程を終えると、さらに高等科に進んだ。高等科は三カ月であつた。努力型の彼は通算九カ月の英語勉強で、どうやら自信らしいものがついた。

もともと彼が上京した第一の目的は「大学まで行きたい」という念願を果たすことであつた。それにはまず、入學資格を得るために中等学校に学ぶか、専検にパスしなければならぬ。

彼は前者を選んだ。専検に合格するための独学は、とかく坐折し易いからであつた。ともかく新聞配達を一日も早くやめたい。仲間の中には學業を放棄して悪所通いをする者もいた。その誘惑もこわかつたが、それよりも合宿部屋が不潔だつたので、ノミやシラミに悩まされた。これには閉口した。

新聞配達を終えると、部数拡張のノル

マがあり、田舎者で口下手な彼には困難な仕事であつた。そのうえ、新聞代の集金もしなくてはならない。時には愛読者が無断で引越してしまつたり、二、三カ月の滞納世帯はザラであつた。このことを店主に報告すると、あかたも彼が無能者でもあるかのようにしかられた。それというのも集金を拐帯して姿をくらます悪質な配達員もいたからである。

主人には怒鳴られ、配達途中では猛犬にほえられ、彼はつくづくこのアルバイトが嫌になつた。内緒で新しい職を探そうち、ついに一軒の店をさがし当てた。もちろん通勤ではなく、住み込みである。それでなくては彼自身が困るからであつた。ついに一年間にわたる新聞配達ぐらしから、おさらばすることができた。

その店の名は東洋陶器（東陶機器の前身）の代理店で大石商店といい、芝の桜田和泉町にあつた。店員は二人いるだけで、そこへ彼が見習い店員として加わつた。月給とも小遣いともつかぬ給金を八円もらつた。東京の市内電車がまだ五銭で乗れた時代である。

見習い店員の仕事は掃除と、店番と配

達であつた。当時はまだ大八車が重宝がられていたところで、配達するときにはこれが使われた。ところが、車じたいが重く荷を積むと小僧にはかなりこたえた。

六本木の坂にかかる、もういけない。小僧の力では乗り切ることができなかった。そんなときには、俗に「立ちん

ていて、難渋している荷車をみると「よいしょ」と声をかけて、うしろから押してくれた。

六本木坂の場合は、現在、高速道路の内回りと外回りが交差しているあたりから、彼らは姿を現わした。もちろん無償ではない。六本木坂の相場は五銭であつたが、これは店の方で負担してくれた。

こうした苦勞をつづけるうちに、平田次二の将来にかける望みは、しだいにほつきりとしてきた。

「どんな小さな店でもいい、じぶんで持ちたい」

というのがそれである。ひと昔いぜんであつたなら「のれん分け」という風習があつて、ある年月を勤めあげると、主家の「のれん」をわけてもらうことができた。

しかし、彼の修業時代にはすでにそうした制度はすたれていたので、自力で独立するほかはなかつたのである。そのかわり彼は夜学へ通うことを許された。



箱根関所跡で（左から二人目、平田氏）

坊」といわれる連中の手を借りた。いまではすっかり姿を消してしまつたが、九段坂や乃木坂などながい坂道の登り口には、かならずこうした連中が屯し

大学を目指して

身についたがん張り

大倉商業を卒業

故・大倉喜七郎の邸跡は現在「ホテルオークラ」と変わっているが、その以前には邸と隣接して大倉高商、大倉商業などがあった。いまの東京経済大学がその後身である。

平田次二は大倉商業の夜学に通うことになった。夜学とはいえ、読み書き、算術、英語などの簡単な試験があり、試験である以上、合格点を取らなければ通学を許されない。さいわい彼は合格していた。以前に正則英語学校で、英語を修得していたことが、このとき大いに役立ったわけである。

この学校には「ラッパ」というニックネームをもつ永田雅一（元・大映社長）も学んだことがある。もっとも平田次二とは年齢において数年のひらきがあったので、両者が顔を合わせたことはない。永田が先輩にあたる。

そのころの夜学生は、まことに種々雑多なものであった。各クラスには大倉商事の丁稚どんたちが、角帯姿で十名ぐらい通ってきていた。いまでいえば、さしづめ企業内留学といったところであろう。

そのほかにも海軍省、愛国生命、安田火災などの給仕さんたちがくる。上級生の中には薄ヒゲをはやして、世帯持ちではないかとおもわれる篤学の生徒の姿も見られた。

夜学の机に落ちつくと、昼間の労働で酷使した足の裏が燃えてくる。教師の低い声で講義がすすむうち睡魔が襲ってくる。おもわずおのれの首の重さで目をさます。

平田次二はがんばり屋であった。太股をつねりながら夜学生の辛さに耐えた。夜の生徒たちが、とかく落伍しやすいのは、この辛さを踏み越えかねるためである。

余談ながら、彼のがんばりぶりは現在なおつづいている。たとえば朝の六時半には会社の社長室にきている。それが十年一日のように狂いがない。判で押したようなという形容がぴったりなのである。

だからといって他に強制するわけではない。しかし、社長のこうした垂範が、しぜんと社内の空気を正しくしていることは事実のようである。

また、すこしぐらい体に熱があっても

休もうとはしない。側近の者が心配して「早くお帰りください」とすすめても、ナマ返辞をするばかりで、結局かえるのは五時ごろになる。なんのことはない、一日勤めてしまう。

このあたりが事業にかける創業者の執念とでもいうのか、サラリーマン社長とはおのずから違ったところがある。いうならば「がんばる」ということが、すっかり身につけてしまっている感じだ。

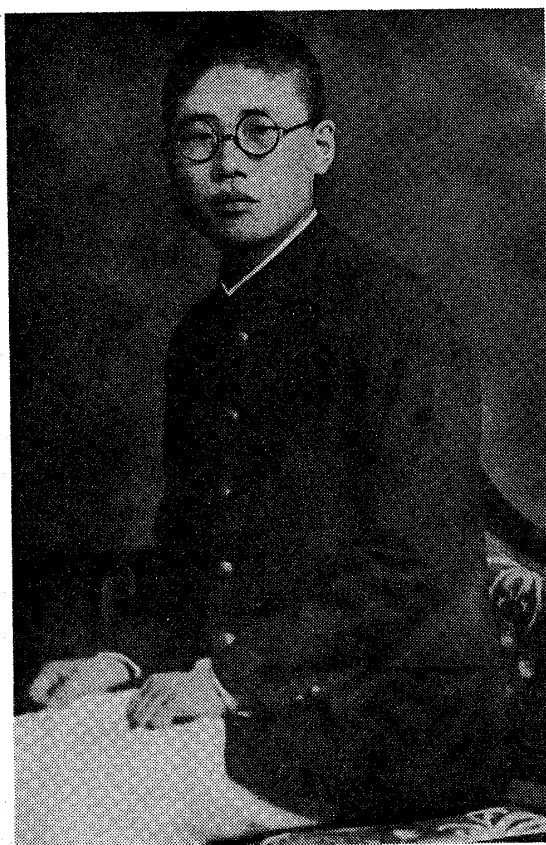
こうした性格は、いつでも極限状態に

課程を終えて、めでたく卒業した。ときには店の都合で遅刻することもあったが、卒業時の成績はまずまずであった。

当時の世間は中等学校を出れば、ともかく一人前の人間として遇してくれた。

ふつうならば、こちらで一服したいところである。だが平田次二はそれだけで満足しなかった。

彼にとって大倉商業を卒業したことは、学業中の乗り換え駅に到着したにすぎない。その付近にどんな美しい山や湖



大倉商業時代の平田氏

おかれていた北海道帯広時代の開拓生活で培われたと見てよい。そのうえ、祖父

母の手許できびしく教育されたことにもよるであろう。ともかく年少にして父母の膝下を離れた者はどこかちがう。

余談はさておき、彼は疲労と睡魔にさいなまれながらも、大倉商業夜間部の全

があっても、そこに心を奪われるゆとりなど毛頭ありはしなかった。

大学である。ふたたび疲労と睡魔のたたかいを続けながら、大学を卒業することが彼の念願であったのだ。獺犬が獲物を追って走る一途さともいえるようか。

独立の日近づく

唯一の楽しみ山登り

中央大学を卒業

平田次二はつぎの目標として、中央大学を選んだ。大倉商業時代と同様に、夜間部へ通う以外には自由な時間を持たなかった。授業の一時間目はほとんど遅刻した。当時はすでに見習い期間を終えて大石商店の番頭格となっていたので、それだけ店の仕事も多くなっていたからである。

当時、彼も青春といわれる時代を迎えていたが、世俗的な遊びとはまったく無縁な青年であった。四年間というものの、ワキ目もふらず大学に通い続けた。民、刑法は花井卓造教授、簿記、ソロバン実技は太田哲三先生に教えられた。

彼の学生時代は世相も混々として複雑であった。伊豆大島・三原山の大自然美を謳歌しながら、火口へ向けて投身自殺をする者があとを絶たなかったのもこの頃のこと、昭和八年一月からわずかの四カ月間に、自殺者六十名、自殺未遂者百六十名余にも及んでいる。こうした奇異な現象はロマンチズムと厭世観とがからみ合って生みだされた。

一方では、時局を非常時であるとする

軍部のかけ声で、初の防空大演習が行なわれている。敵機襲来を想定する灯火管制が主として行なわれたが、一せいに電灯を消すということは、国民に非常時意識を植えつけるために、はなはだ効果的であった。

また、軍需産業の発展は結婚ブームを招いた。庶民のふところがうるおったからである。夕方の東京駅を出て熱海に向かう列車は、あまりにもカップルが目立つために「新婚列車」という異名で呼ばれるほどであった。

大学出のインテリは、一挙に未婚女性のおこがれの的となる。

ハナムーンの

夜に見る夢は

絹の手ざわり絹のつや

などの流行歌をはじめ、さまざまな花嫁歌謡が街にはんらんしたのもこの時代のことである。

夜の蝶が舞うカフェーやバーの数は全国でざっと三万軒、そのうち東京に七千女給の数は二万二千人とされた。昭和七年四月には目黒競馬場ではじめて日本ダービーが開催され、こえて八年十一月には東京府中競馬場が開場している。

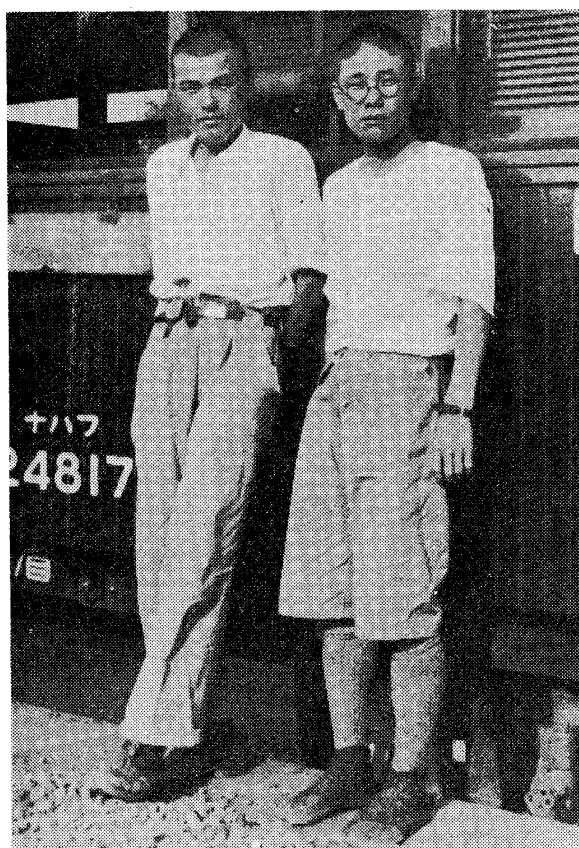
だが、平田次二にはすべて無縁であった。そくばくかの蓄えはあったが、それは遊ぶためのものではなく、将来独立する日の資金に用意されたものである。

わずかに楽しみといえ、無銭旅行にも等しい山登りであった。あまり頑健とはいえなかった彼にとって、低山歩きは健康法でもあったわけである。掲載の写真は学友と磐梯山へ登ったときのもので、今では地下足袋すがたの旅行者などまったくみられない。撮影したホームは

よ独立の日も近づいたことになる。

これよりさき、昭和六年に徴兵検査があり、幸か不幸か彼は丙種になった。徴兵検査にはこのほか甲種と乙種があって、甲種は現役兵として編入され、乙種は補充兵となる。丙種はほとんど兵役とは関係がない。

それに郷里の岐阜で検査を受けたので、彼の身体は土地の壮丁にくらべれば一段と劣る。丙種と認定される理由の一つはそこにもあったわけである。



磐越西線川桁駅で（右、平田氏）

福島県郡山から会津若松へ抜ける磐越西線の川桁駅で、この駅を出ると猪苗代湖がある。

昭和十年春、平田次二は中央大学商学部を卒業した。もはや押しも押されぬ社会人である。それと同時に、いよいよ

だが、三十代になると時局は戦時に突入し、兵役とは関係ないとおもわれていた彼も国民兵役に編入される破目となった。ときには多摩川の河原で匍匐前進などの練習をやらされたが、結局は兵隊に行かず仕舞いに終わっている。

新橋で晴の独立

配管材料などを扱う

卒業と同時に結婚

平田次二は大学を卒業するとほとんど同時に結婚している。二十六歳の春であった。べつだんにロマンスの花を咲かせたわけではなく、見合いである。

相手の女性は二十四歳、その名を美津子といひ、帯広の質舗の娘であった。

この縁のつながりは、次二の叔父が同じ帯広で中古衣料商をしていたので、美津子の父を知るようになったもの。商売柄しばしば接触する機会があったからである。それに彼女の生家も岐阜であった。

縁談はわずかに一度の見合いで成立し、

めでたく東京・乃木神社で挙式した。いらい円満で三男をあげている。長男の公一は平田バルブの取締役総務部長で企画室担当、次男佳司は経理責任者、三男悦三は同社川崎工場の倉庫責任者として父の事業に協力している。早くも一男三女の孫があつて、その可愛さから日曜日のゴルフ場通いも時折り中止されることがある。

孫の可愛いと向膈の痛いのはこらえられぬと、世俗にいう。彼の場合は、少年から青年時代へかけての歳月がきびしい

ものであつたかわりに、現在は家庭的にまったく恵まれている。

平田次二が狭いながらも一戸を構え晴れて独立したのは、昭和十二年六月のことである。創業の場所は東京の芝区新橋六丁目、現在の港区東新橋六丁目にあたる。

店の構えは間口二間半、奥行き六間しめて一五坪ほどの借家住まいで、二十歳前の若い者ひとりを雇つて発足した。独立資金はわずかに三百円。それというのも大学へ通う学費に追われて、貯蓄することが思うにまかせなかつたからである。

店の名称は「平田商店」。主たる営業は配管材料と水道の蛇口などであつた。

彼がこの商売を選んだのは、旧主家である大石商店が衛生陶器をやつていたのでそれとの競合を避けたためである。それに業種は別でも衛生陶器と配管材料との関連は密接であつたから、仕入れ先や得意先との交渉をもつのに便利でもあつた。九年間というものの大石商店に勤めた経験が、独立するに当たつて大いに役立ったわけである。

創業当初は銀行の信用もなく、掛け売

り代金が未収にでもなると、資金繰りに苦しまなければならなかつたが、昭和十二年当時の世相が彼をたすけてくれた。

その世相とは――

この年の七月、芦溝橋事件が勃発したのを契機として、それまでくすぶり続けていた日中関係が重大化し、つづいて起こつた第二次上海事件のため戦局はますます拡大され、ついに全面的な日中戦争へと発展してゆく。

九月には軍需工業動員法が発動されそ

わゆる「赤い思想」やその信奉者たちは迫害され、言論は弾圧によつて統制される時代に移る。

こうした情熱のうちにも戦争は進められ、十一月の杭州湾奇襲上陸によつて首都南京の陥落を見たが、そのときに「かいらい国民政府を相手とせず」の声明を発したため、自ら和平の道をとぎして、ついに長期戦への泥沼へとおちこんでしまう。

昭和十二年とは、かくも激動の世の中



乃木神社で挙式

れと同時に臨時資金調整法、輸出入品等臨時措置法が制定実施され、戦時経済体制へと急ピッチに移行する。翌十月には企画院が創設されている。

また、一方では「パーマネントはやめましょう」といった細かい神経の使いかたで国民精神総動員運動がはじまり、い

であつたから、どここの工場も軍需拡張で多忙をきわめていた。工場を増設するには配管材料がいる。平田商店はこのチャンスに恵まれたわけである。

開店して三か月の中には店員も三人にふえた。それでも、飛ぶように売れる配管材料を捌ききれぬありさまであつた。

DMで拡販図る

一流企業とも取引開始

バルブに主力を置く

昭和十四年十二月、平田商店は株式会社に改組する。資本金は十九万五千円。資本金としてはちょっとはんだな感じもするが、それにはわけがある。二十万円以上になると、大蔵省の認可をえるのが手続き上うるさかったからにほかならない。

株式会社へのお膳立ては、すべて計理士前川輝義がやってくれた。前川は中央大学時代、平田次二とは同窓の間柄であり、現在は平田バルブ工業の監査役となっている。

平田商店がバルブに主力をおきはじめたのは株式会社に改組された前後からである。得意さきもしいに一流企業を相手とするようになった。

たとえば、当時大森にあって、通称「ガス電」と呼ばれていた瓦斯電気工業、それに日立航空機、日本自動車、芝浦製作所鶴見工場、マツダ・ランブの東京電気日産自動車鶴見工場、日立製作所亀有工場などがそれである。

ところで、こうした一流企業にどうして食い込んでいったか、その方法がおも

しろい。その一つはハガキによるPRである。それぞれにしつように思われるほど送りつけた。いまでいえばダイレクトメールの販売戦術だ。

戦争の影響で何もかも品薄のときであったから、反響はいくらでもあった。ハガキが相手方に到着すると、すぐに見積り書を出せといってきた。瓦斯電などはこの方法で独自に開拓した一つである。

また、同業があまり訪れそうもない遠隔地の工場にもすんで出かけた。当中島飛行機の工場は国電中央線の三鷹にあった。いまでこそ新橋―三鷹間はあまり遠いとは思われなくなったが、昭和十四、五年ごろの三鷹は街区というよりも田園であった。

その中島飛行機では、あたかも彼がやって来るのを待ってでもいたかのようになり、取り引きの話し合いはすぐに成立した。このとき以来、戦争が終わりをつげるまで、月々大量のバルブと配管材料が納入され続ける。

工場が増設されるときには、それがさらに大量となり、一部は航空機にも使われた。そればかりではなく、材料入手の便にも恵まれる。このころは偉人の銅像

やお寺の梵鐘まで半ば強制的に供出を要請され、軍需資材とされていた時代で、軍の指定工場でなければ、容易に欲しい材料を手に入れることができなかった。中島飛行機はいうまでもなく指定工場という金看板をもっていたから、平田は主として電気銅の配給をうけた。しかも価格はヤミ値の三分の一以下であった。この恩恵は大きい。

現在の平田バルブ工業株式会社と社名



平田商店時代の店構え。二階は住居となっていた

商店神話時代の面影はすでにない。時節柄、材料難のころであったにもかかわらず、在庫は可及的豊かに用意し、不時の大量注文にもこたえる態勢もととのった。そうするだけの力があつたわけである。

社名にも「バルブ」を標榜してメーカーらしくなった。だが、実はまだ自家生産の設備をもつまでには到っていないからである。これでは競争入札もままならぬし、利もうす

い。平田次二の念願は「一日も早く、自前の工場を持ちたい」という、これであった。

そのうち主として、機関銃を作っていた豊川海軍工廠（愛知県）が施設を拡充することになり、そのバルブを平田が納入することになった。さきゆきのことを考慮してか、工廠からの発注は必要

が変更されたのは昭和十六年十二月のこととで、平田商店発足いらいわずかに四年半歳しか経過していない。まずは順調な発展ということができる。

主人ひとり、小僧ひとりといった平田

以上に大量であった。平田はいよいよ自家工場の必要を痛感する。しかし、このときの注文にこたえるには時間がない。

直系製作所を設立

バルブの使命、理想追う

蒲田の町工場を丸抱え

平田次二は臨機の措置として、せめて専属となってくれる町工場を物色した。それがあった。場所は蒲田の萩中で、工場の名を小林製作所といった。彼はそれを丸抱えにして平田バルブ製作所を設立した。昭和十八年五月のことである。彼のかねてからの念願は、なかば達せられた。

ここで、バルブとはどういうものかについて触れておきたい。

一般にバルブというと、流体を止めるために使うものであって、玉形弁とか仕切り弁によって代表されるものであることはすでにのべた。しかしバルブの種類がどれだけあるかという問いにたいして、言下に答えられる人はおそらく一人もないだろう。

それほどにバルブは複雑多岐であって、いかに研究しても研究し尽くせない金属製品なのである。そこでバルブの定義はどうであるかという総括的には「バルブとは管または圧力容器などに装着され、流体または加圧体を制御するもの」といえる。この「制御」という機能

にバルブの大切な使命がふくまれている。

たとえば、一般の手動弁の場合、おおむね流体を通したり、遮断することであり、自動弁の場合は主として流量を調節することである。

しかし、プラントあるいはプロセスが非常に高度化された現在では、わずかな漏れも許さないことが多く、調整の精度も非常に高いものが要求されている。

同時に構造も使用条件の広汎化にともなうて、多くの複雑なものが生産されており、制御そのものの意義は、むかしにくらべて大きな違いがある。

このように流体を遮断したり、調節することがバルブの使命であるとすれば、それを満足させれば、バルブとしてはそれでよいことになる。バルブが現在のようにならぬのは当然と考えられていた。

したがって、あまり問題にされなくてすんだ。ところがいまは、そのような安易な考えは許されない。それというのも長期連続の使用に耐え、過酷な流体条件のもとで、厳密な「制御」を果たさねば

ならないからである。

この使命にこたえるためには、使用条件に適した材料の選定と、合理的な設計に加えて、高度な加工技術が総合されなければならない。

バルブの形状とか構造だけを見ると、きわめて単純なものと考えられやすいが、それは以上のべたような本質的なバルブのあり方を、認識していないからである。

だが、その理想は太平洋戦争によって甚大な被害を受け、容易に実現することができなかった。平田バルブ工業も平田バルブ製作所も空襲による爆弾で、一挙に灰燼と化してしまったからである。

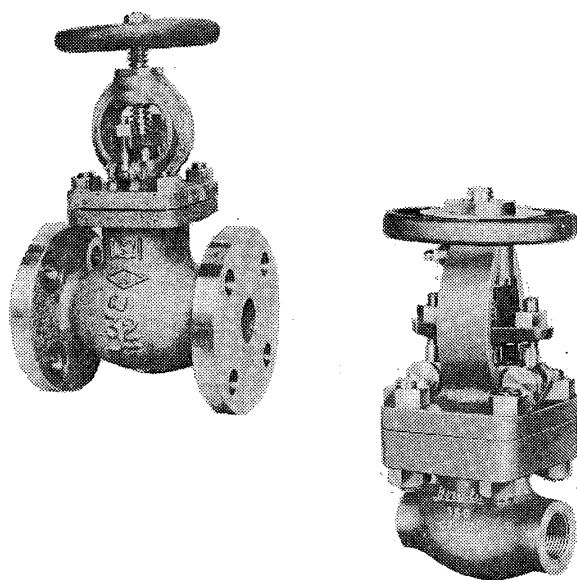
B29を主力とする米軍機の東京空襲は、昭和十九年十一月二十四日にはじまった。はじめは中島飛行機など航空機工場がねらわれたが、やがて市街地への無差別爆撃となった。蒲田萩中にあった平田バルブ製作所が

やられたのは、翌二十年三月九日夜の空襲で、このときにはB29百五十機によって、東京の約四割が焼き払われた。

また、新橋の平田バルブ工業本社が灰となったのは同年五月二十五日の爆撃によるものであった。このほか芝神明神社の付近に設けてあった五十坪ほどの倉庫

も焼け、汐留の住居も跡がたなく燃えてしまった。

当時、平田バルブ製作所は平田バルブ工業の準直系的な存在に過ぎなかったが、設立と同時にバルブのもつ使命に徹しなければならぬ宿命を背にした。それはまた、平田次二の理想でもあった。



玉形弁（左）と仕切り弁（右）

駐留軍への納品

バルブに大きな需要

再建への営業活動

平田次二は戦災によって営業の本拠と生産設備をほとんど同時に失ったが、幸いにしてただ一つ残るものがあつた。それは世田谷区駒沢に疎開のための家屋を用意していたことである。これが空襲による焼失を免れた。

現在、彼はここに住んでいるが、土地は二百十坪、建て物六十五坪で買収価額はわずかに五万円にすぎなかった。戦争中はこの家の前に高射砲陣地があつたために、危険とみて敬遠されていたようである。

新橋の本社が焼けたあとは、社長夫妻と従業員二人だけとなつてしまつたが、製品と材料はほとんど駒沢に移しておいたので、その分だけは無傷のまま助かつた。またバルブは金属製品であつたから衣料や木材のように、あるいは紙幣のように、焼けることがないので焼け跡から回収することも可能であつた。彼にとつてこれも幸いした。

とりあえずは営業の本拠を駒沢に移したが、戦局は日増しに敗戦の色を濃くしバルブの需要も激減して、しばらくは開

店休業の状態がつづく。

やがて終戦。国民は虚脱と混乱のフチにたたき込まれる。何をすればいいのかわからない。そのうちアメリカの駐留軍がマッカーサー元帥にひきいられてやつてきた。それと同時に駐留軍施設の大きな需要が起こる。建設復興資材であるバルブは、それによって立ち直りの機会を与えられる。

平田バルブ工業もその例外ではない。各地駐留軍関係への納品がはじまる。それに在庫量が他にくらべて豊富であつたから、有利な立場であつた。

昭和二十一年ごろになると、出征していた社員たちも引き揚げてきた。それに新入社員も加えて陣容もしだいにととのってくる。再建への営業活動はこうして活発になつていった。

一方、生産部門である平田バルブ製作所はどうなつたかというところ、昭和二十一年十二月に社名を平田産業株式会社と改め、バルブ製作のほか一般商事関係、工事方面へと進出している。

ことに工事方面では食品工業に深い関心を示していたことがはっきりと読みとれる。たとえば醤油のヤマサ、合成酒の

大和醸造、千葉の殿粉工場、そのほか東北地方の食品会社工事に数多く手をのばしている。

なぜ好んで食品工業の仕事に積極的であつたのか。その理由はいささかでも食料品を入手する便宜が欲しかつたからにほかならない。さきにも触れたように平田次二は実弟のひとりを栄養失調症で失っている。社員、従業員たちの家族も飢えている。その栄養補給のためであつた。当時は米の配給などまったくなく、そ

が巻くといった時代であつた。

窓のうらみと、たべものの恨みはおそろしいといわれるが、食事に差別をつけたいという理由だけで梨園の名門片岡仁左衛門が家人に殺されたり、ある地方の判事が職業柄ヤミ米をいっさい口にせず、餓死したのもこのころの話である。

いまはこの平田産業も使命を終えて、昭和四十年に休業届けを出し、目下のところ活動を停止している。

昭和二十三年五月には、平田バルブ工



再起の出発点、駒沢の社長邸

の代替食糧として大豆やトウモロコシの粉が主食とされていた。新聞には「大豆飯の炊き方」といった記事がでたり、皇居前では「米よこせ」デモが行なわれたり、二十五万の飢えた労働者が集まって「食糧メーデー」がひらかれ、赤旗の渦

業にとって特筆すべきことが起こっている。この年はじめて南米アルゼンチンの石油精製会社に菱にH印の平田鍛造バルブ二万ドルが輸出されたのである。この輸出は戦後においては先駆的なものであつた。

運命共同体の信念

社員持ち株制を実施

労組にかわり平和会

平田バルブには労働組合はない。そのかわり社員、従業員の親睦団体として平和会がある。この会ができたのは昭和二十二年十月のことであった。

この前年、画期的な労働組合法が施行され、労働者たちはインフレの昂進や食糧不足など極度の生活不安から、われ先にと労働組合を結成した。

戦前は昭和十年の九九三組合が最高とされていたが、昭和二十一年末の数字をみると、一七、二六六の組合が結成され組織された労働者は四、九二五、五九八人にも達している。(労働省労働統計調査部の調査による)

この数字は年を追ってふえているが、こうした全国的な風潮の中にあつて、平田バルブは例外的な存在であつたといえる。世間の労働者たちは、当然の権利のように、会社に向かって、分け前を求める気分が強くなり、それまでの良俗の主従関係はにわかに冷たいものとなつていった。

だが、平田バルブの社員、従業員たちは朱にもまじわらず、赤くもならなかつた。

た。何故であろうか。その理由は、平田次二の誠実な人柄に求めるより他はない。

例えばこうである。

平田バルブは大企業との取り引きが多い。したがつてその方面からの定年退職者を迎え入れるというケースもでてくる。この場合、大企業側から役付きとして入社することを要請されても、この一点にかなするかぎり、彼は決して首をタテにふらない。

社内の役職は外来者のためにあるのではなく、あくまでも平田バルブの社員、従業員のために用意されたものだからである。ちかく社員の中から役員が誕生する。

いうならば平田次二の経営方針は、運命共同体という信念によって貫かれている。だからといって彼は、そのことをゼスチュアアまじりで社員、従業員たちに吹聴しない。しかし、平常の彼の言動がそれを無言のうちに語っているので「納得」がうまれている。

ひと口にえば、苦勞人の慈味とでもいえようか。

平田バルブの本社は古くて狭い。彼自身も「ブラックですよ」という。にもか

かわらず社内の器物から什器にいたるまで磨かれたような清潔さを保っている。こうしたところにも、社風の一端がのぞかれる。

さて、平和会であるが、これが発足したときに会社は、当初の流動資金として一〇万円の出費を行なっている。それがいまでは貸し出し金一二〇万円のほかに一五〇万円余の資金が備蓄されている。平和会の資金には貸し出しの制限があるので、社員にそれ以上の必要が生じたとき

とである。実施第一回目には勤続六年以上の社員十五名にたいし、一人五〇株ずつ無償で与えた。これには顕彰の意味がふくまれていたこともちろんである。

その後、七年以上勤続者には一〇〇株まではよいことに改められた。現在、七年以上二十五年までの勤続者は六五名、その全員が持ち株社員で、合計株数は一五、〇〇〇株に達している。

持ち株制度は戦後の現象で、そのねらいとするところは愛社精神を維持し、高



新橋にある平田バルブ本社

きには、会社が貸し出しを行なっている。平和会もいまでは生まれていらい、二十数年になった。

以上のべたことが、平和会誕生の経緯である。

さて、平田バルブに社員持ち株制度が実施されたのは、昭和三十三年五月のこ

めるところにある。平田バルブがこれを実施したのも、その期待があつたからにちがいない。

だが平田次二は、風馬牛われ閑せずであつた。社員たちに配当を与えることが出来るのをよろこんでぐらいのところであつたらう。

会長には大野氏

25年4月に創立総会

郷友の集い「美山会」

平田次二の生まれ故郷岐阜県山県郡には葛原村、谷合村、桜尾村、高富町など一町十一カ村がある。こうした町や村から青雲の志を抱いて出郷してきた者は、東京・横浜あるいはその近郊にすくなくない。

そこで、少年時代にふるさとを後にしている彼は、山県郡出身者の親睦を図るために、かねて県人会のようなグループを結成したいと念願していた。

するととはからずも谷合村出身の政客・大野伴睦から「山県郡出身者だけの友の会」をつくりたいとの呼びかけがあった。平田次二にとっては、まさしく渡りに船である。

さっそく昭和二十五年四月十五日には、創立総会にかわる会合が芝の桜田会館で催された。このときから彼は、会の世話人として活躍しはじめる。

この会合には大野伴睦はもとより吉田紹欽（東京教育大教授）郷宗二（岐阜の郷鉄工所社長）などが顔を揃えた。のちには社会党代議士大野幸一、各務謙吉の子息、各務八郎なども会員として参加し

呉越同舟の縁を呈するようになる。

名称は美濃山県郡の郷友の集いであるところから「美山会」ときまった。名付け親は大野伴睦である。任侠の政治家といわれた大野には、公私にわたって話題が多い。

東海道新幹線ができたときには、田んぼの中に羽島駅を作らせ話題をふりまいたのもその一つ。また二十七年には晴れて衆議院議長となったが、そのとたんに抜き打ち解散が行なわれ、岐阜の演説会場では敵方の聴衆から「三日議長」とやじられたことがある。

そのとき彼は

「一輪咲いても花は花、一夜添うても妻は妻、たとえ三日でも議長は議長」と名セリフをとばして相手をおさえてしまった。

大野は吉田茂が政権を取っていらい幹事長、衆院議長、副総裁といつも政界主流の座からはなれたことがない。大勢の動きを読み取るカンのよさと、変わり身のうまさば超一流とされ「中央気象台の予報ははずれても、大野の政局予報は狂わない」とまでいわれた。

惜しまれて世を去ったのは昭和三十九

年、ともかく彼のゆくところ歌あり、句あり、浪花節あり、笑いあり、涙ありで庶民的なニオイのぶんぶんする政治家であった。

句といえは彼は「万木」と称てし俳句も詠み、その句碑は全国に散在しているが、岐阜の牧谷には



衆院議長官舎で、中央が大野伴睦会長

覚寺、第四回は芝罘平町の料亭「いろは」第五回目は芝高輪南町の衆議院議長官舎で、春季例会と懇親をかねてゆく。会員数も会長大野伴睦の名声が高まるにつれてふえていった。

現在、美山会事務所は平田バルブ工業内におかれているが、伴睦会長の没後はこちらのグループの常で、ほとんど有名無実の存在となっている。

それに会長があまりにも大物であったから、後任会長になろうとする者ががいなかったという事情もある。しかし、最近になって美山会の活動を再開しようという声が出ているという。

名作「夜明け前」を書いた島崎藤村の言葉に血につながるふるさと心につながるふるさと言葉につながるふるさと

という詠嘆がある。遠きにおいてふるさとを想う平田次二の胸底にこの詠嘆はつながる。いまは死火山のような美山会も、やがて火を噴きあげるにちがいない。

鶯や美濃の牧谷紙どころ 万木

と詠んだ句碑が残っている。

ところで美山会は、第二回の会合を世田谷区の平田次二邸、第三回は鎌倉の円

歐洲で人気さらう

成功した巡航見本市船

「秩序ある輸出

昭和三十四年六月、平田バルブ工業本社内に日本バルブ輸出振興株式会社が設立された。この新会社は同業の北村バルブ製造と高見沢工機との三社共同出資によってできたもので、日本内地の商談には一切ノータッチ。社名が示すとおり輸出振興をはかるのが目的。代表取締役には平田次二がなっている。

俗な言葉でいえば「寄り合い所帯」であるが、それでも年商一億円以上をコンスタントにあげている。

ところで、この会社がなぜ三社共同出資によって生まれたかというと、話はその前年にさかのぼる。すなわち昭和三十三年十二月、日本産業巡航見本市船協会のアトラス丸が中南米巡航の旅にのぼった。

このとき、前記三社が共同して同船内の商品展示用の小間（ブース）二つを契約した。ひと小間二百万円であったから二つでは四百万円ということになる。

この二つの小間に三社のバルブが展示されて、同船は十二月八日に日本を発ちバルパライソ、ブエノスアイレス、モン

テビデオ、サントス、リオ、ハバナ、アカプルコなど十一カ国十二港をまわって翌三十四年の五月に帰着した。

三社にとって、この巡航見本市船の効果はどうであったかというと、まんざら悪くはなかったのである。そこで今後も引き続き出陳しようということになり、その代行機関として「日本バルブ輸出振興株式会社」が設立され、見本市船協会のメンバーに加入したわけである。

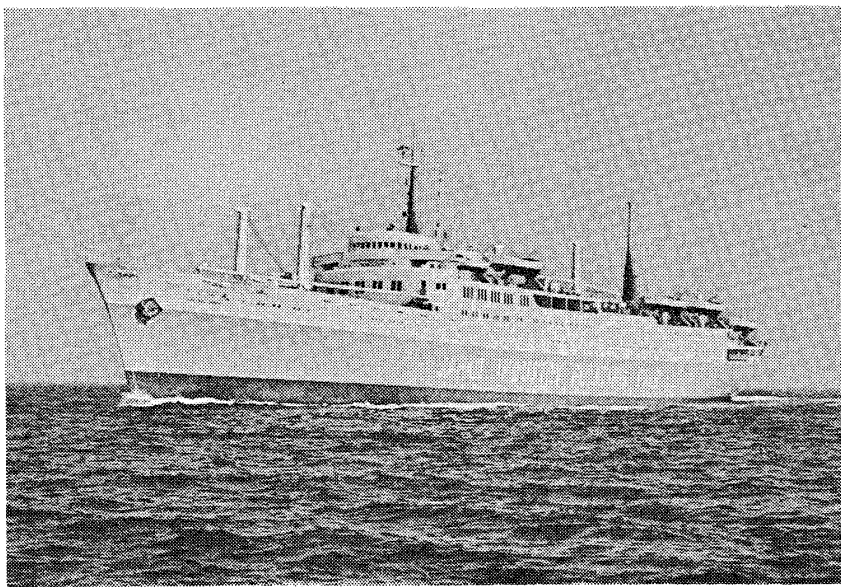
いらい隔年に出航する船に展示を欠かしたことがない。その反響で一億円をこえる年商をあげているが、ことしも七月には十回目の船がヨーロッパに向けて出てゆく。

巡航見本市船の目的は、日本にたいする正しい知識の普及と、工業水準の現況を示すところにある。過去九回にわたる巡航で、その使命はかなり果たされてきたとみてよい。ことに発展途上国では驚きと賛辞をもって、日本品の優秀さを認めている。

では先進国のたむろするヨーロッパの場合はどうか。その反響を第五次（三十九年）の旅からさぐってみる。このときはイタリアのジェノバを皮切りにスペイ

ン、フランス、英国、オランダ、西独と北上し、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの北欧三国をまわり、再び南下してベルギーに立ち寄り、最後にポルトガルを訪問している。就航したのは「さくら丸」である。

フランスのルアーブル港でひらかれた



当時の巡航見本船さくら丸

まで出る人気をよんでいる。このため入場時間を三十分延長してやっと混乱を収めたという騒ぎがあった。

この日の入場者は九千五百人であったが、これを含めて見本市船協会の発表によると、第五次の巡航中に「さくら丸」を訪れた参観者は総計十七万三千百九人

商談はおよそ二千五百件、約六百八十万ドルにのぼっている。

当時、日本の見本市船がヨーロッパの先進国市場で、これだけの人気をほしきままにしたのは、日本の工業発展が西欧諸国の一般大衆にまで強い関心の広がりをもっていたことを物語る。

ともかくこれまでは、かなりの成果をあげたことは事実。だが日本商品の進出にたいする各国の警戒心がうかがわれる現在、今後の具体的な商品の売り込みには、よほど慎重に、いわゆる「秩序あ

る輸出」をしなければならないであろう。

船内見本市では、朝から家族連れの市民が続々とつめかけ、午後になって入場のおそいのにいらだった群衆が先を争ったため、入り口で押し合いとなり、失神者

原子力発電に貢献

GEから感謝状うける

溝の口に工場建設

神奈川県川崎駅と東京都下の立川駅とを結ぶ鉄道を南武線という。溝の口駅はこの沿線上にある。平田バルブ工業がこの地に工業用地を購入したのは昭和三十二年五月のことである。

いまでこそ溝の口は駅周辺に繁華な商店街と、山手に住宅街をもつりっぱな町となっているが、当時はまだ田園風な小集落にすぎなかった。

現在、平田の工場がある川崎市久本町一五番地は溝の口駅から徒歩数分のところ、いわば駅前といってもよい。にもかかわらず周囲はほとんどたんぼで、工場の建設に着手した同年八月ごろは、江戸家猫八の声帯模写よろしく、カエルの樂園であった。

目ぼしい建て物といえば、東芝玉川工場があっただけ。それだけに地価も比較的安く、坪当たりわずかに一万円であった。それを七五〇坪購入したわけである。いわば東芝工場とともに草分け的な存在であった。

以来川崎工場がすっかり出来上がるまでにざっと十年の歳月を要している。ま

ず最初に一〇〇坪の検査場ができた。ここには機械工場も一部ふくまれており、流量測定装置も設けられた。

つぎに一七〇坪の機械・仕上げ工場が完成した。これに付随して高温炉、低温炉、溶接場がそなえられ、ほかに工具室と機械事務室がある。

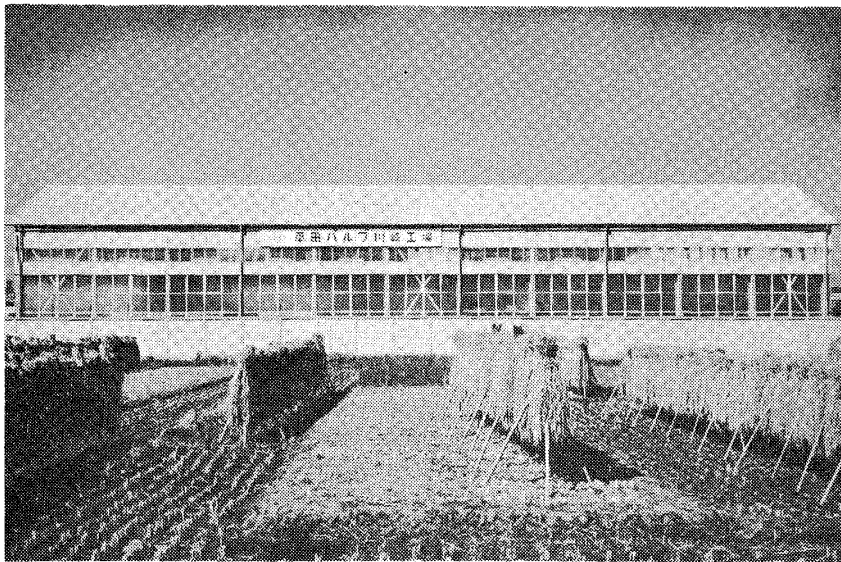
三番目にできたのが総合室用で、これは三階建て。この一階には素材倉庫と変電室のほかにガンマ線検査室、イリジウム検査室、X線検査室があり、二階は倉庫専用、三階は食堂と集会場にあてられた。

最後に延べ四八〇坪という五階建ての本館ビルが建設され、社長室はこの最上層にある。そのほか設計部などが配置転換されて移り、平田バルブが誇る技術センターが完成した。ときに昭和四十二年六月のことである。

その後、さらに各種の研究試験装置がつぎつぎと設けられ、むずかしい原子力、火力、酸素、石油化学などシビアな特殊バルブの需要にこたえることのできる生産部門の充実が果たされ、俗な言葉でいえば「どんと来い」といった態勢が出来上がった。

また昭和四十五年十一月には通産省から高圧ガス設備（高圧ガスに使用する弁類）の耐圧試験および製造にたいする認定工場とされている。バルブ業界でこの認定をうけている工場は、いまだ五指に満たない。

その結果、ユーザーからの要求があれ



田園の中の工場、第一期工事

をみてみると、四十四年の売り上げは月の平均で約一億五千万円以上となっている。そのためラッシュにつぐラッシュの日がつづき、社員たちの慰安旅行は中止され、注文を受けても納期の問題から辞退しなければならぬ状態で、そのうえ受注残高も五カ月分をのこしている。

また、前年から本格的にはじまった原子力弁の製造も順調に進み、これが原子力発電所の建設に大きく貢献し、ことに日本原子力発電会社敦賀工場の場合にはGEから感謝状を受けている。

その理由は、日本ではじめての沸騰水型原子力発電プラントにたいし「よくその重要性を認識し、品質の向上、納期の確保」に示した努力によるものである。

GE（ゼネラル・エレクトリック社）といえは世界に技術を誇る大企業。めったなこと

ば、製品に平田バルブの認定番号入りの銘板を取り付け、それに正式な合格証明書を発行することが出来るわけである。

ここらで、川崎工場全館完了後の業績

では感謝状などださぬ相手だけに、平田バルブとしても鼻が高かったわけである。

期待される中南米

高技術の特殊バルブ

メキシコへ飛ぶ

昭和三十五年八月、平田バルブ工業は資本金を七百万円に増資、この年、平田次二はメキシコに出かけている。彼にとっては初めての海外旅行である。その目的はメキシコの国策的な石油会社ベメックスとの商談を果たすためであった。

それにメキシコとはかねてから取り引きがあり、いちどは同国を見ておきたいからでもある。往路は東京を発ってバンクーバーに立ち寄り彼はここに十二時間滞在する。短時間であったのは、航空関係によるものである。

バンクーバーではジェットロの岡本薫所長からメキシコのバルブ事情をきく。このとき、岡本所長は、話のついでに「日本のウナギの蒲焼きがなつかしい」という。平田にはこの言葉が妙に耳底にのこった。

やがて彼の乗った飛行機はメキシコに着いた。ところが東京を発ったときに委託しておいた旅行荷物のうち、メキシコの人たちに贈るために用意した土産物の荷物が一個どうしても見当たらない。その中には自分の身の回り品も詰めてあった

から、さっそく不自由をしなければならなかった。

八方しらべてみたら、委託を受けた東急航空がどうした手違いか、バンクーバーで積み忘れていたことがわかった。結局、その荷物は平田が東京へ帰着してから十日程も過ぎて手元に戻ったが、大いに恐縮した東急航空では、別便で彼のために特別の便宜をはかっている。

その別便というのはバンクーバーの岡本所長に宛てたもので、中身はウナギの蒲焼きであった。東急航空ではこれを同地向けの塔乗員に託し、即日岡本所長に届けている。折り返し所長からは大喜びの返事が届く。平田次二にはこうした苦勞人の味がある。

さて、メキシコの首都メキシコ市はアナワク高原上、標高二二六〇メートルにある。そのため酸素が少ないので、ホテルについても二時間か三時間の休養が必要とされる。この市の官庁も銀行も一般の会社も午前十一時になると執務は中断され、午後三時になるまでは開店休業状態となる。その時間が過ぎると夜の七時まで働く。それがこの風習であった。現地では東洋棉花（現・トウメン）が彼

の世話をしてくれ、通訳には日本人とスペイン人との間に生まれたイトオをつ付けてくれる。

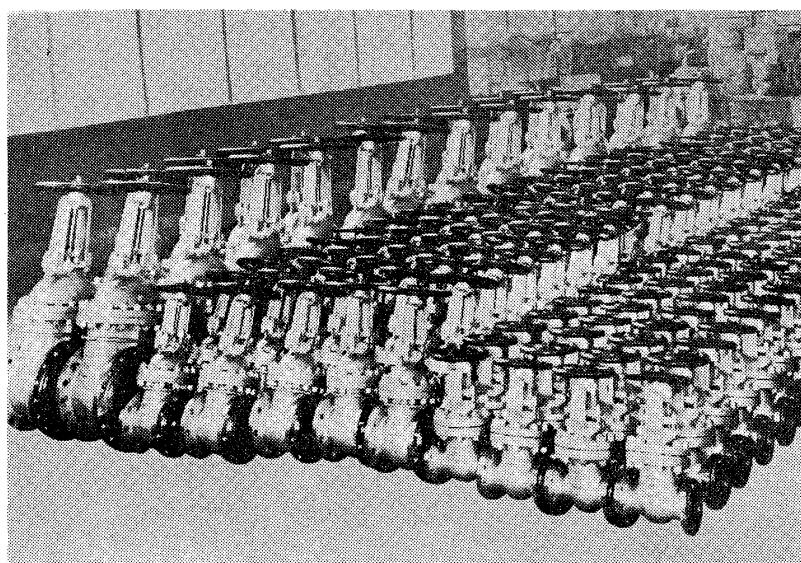
メキシコには三日間滞在したが、その間に彼は砂漠のピラミッドに沈む夕陽を眺めたり、建築物としては世界的に知られるメキシコ大学などを見学した。建て

た。

ところで訪問の主目的であったベメックス石油（公団）との商談は、さまざまな事情から不調に終わった。当時メキシコのバルブ企業は米国との技術提携あるいは合併会社という形で存在しており簡単な灌漑用バルブ・メーカーを除いて四十社ほどあった。

そしてバルブの輸入量は、総額の九〇％までを米国に依存しているという状態で、残りをフランスと日本がわずかに占めている程度にすぎなかった。

これに対してメキシコ大統領の考えは、ただ米国企業にのみたよらず、広く世界各国の技術導入、合併会社の進出を望んでおり、日本においては平田バルブに白羽の矢が立ったわけであるが、ついに意見の一致をみるまでにはいたらなかった。



大量に輸出される平田のバルブ

平田次二はこのことにかんしてつぎのようにのべている。すなわち石油化学、

原子力用バルブのうち、高技術を必要とする特殊バルブの輸出は、中南米諸国では未開拓の商品なので、今後の伸長は十分に期待できる。現在はその言葉どおりになっている。

ステンレス弁受注

かなり値切られる

ソ連への輸出に成功

昭和三十八年の冬、平田次二はモスクワへの旅に立つ。このときは技術社員を同道しているが、メキシコについて二度目の海外旅行である。

ソ連とはそれまで大華貿易（住友商事系）を通じて年間一億円ていどの取引引きがあったからで、このときの旅には大華貿易から案内役としてハルビン大学出身の社員を一人つけてくれた。

モスクワでの貿易窓口はただ一つあるだけで、日本の官庁のようにあちらこちらとウロウロすることはない。だが、困ったことにはこちらから窓口を訪れて商談を進めるといふ自由はなく、先方からの呼び出しを待たなければならないことであった。

そのため彼はホテルから外出することができない。いつ呼び出しの電話がかかってくるかわからないからである。それでも滞在中いくたびか電話があった。やれうれしやと出向いてゆくと、値引きの掛け合いである。それが実に執拗なのに彼はおどろいた。一般の企業相手ならいざ知らず、れっきとした国家公務員なの

だから、なおのこと奇異に感じた。

商談の終わったあとは同行の大華貿易社員の案内でモスクワ市内の見物に出かけた。道路は広く、真っ直ぐに果てしなくのびていて、市街地には紙屑やタバコの吸い殻ひとつない。清掃が行き届いているうえに、市民たちの公德的なマナーがよいからであろう。ともかく、その清潔さはこちよかった。

全般に自動車の往来があまり多くはないので、道路が一層広く見える。だが、交通信号を無視して平気で道路を横断する歩行者をよく見かけた。

ところが、青信号であるにもかかわらず、自動車の方が一旦停車して、歩行者優先をしている。いかにもその風景が大国らしくてよかった。これが日本の場合であつたら、歩行者はハネ飛ばされていたことだろう。当時、モスクワ市内には六千台のタクシーがあつたというが、実際にはタイヤ不足で、その半分しか走っていないかったという。

そのためタイヤ泥棒が横行し、夜間はうっかり駐車しておけないという話も聞いた。後日、日本から大量のタイヤコードが輸出されるのを知ったとき彼はさも

ありなんと思つたそうである。

モスクワ市内は十七区に分かれていて、そのほぼ中央にクレムリンがある。そのかたわらには船頭で知られるボルガ川の支流モスクワ川がゆるやかに流れている。

クレムリンから北東へ古めかしい城壁沿いにゆくと「赤の広場」があり、レーニン廟はそこにある。平田にはそのたたずまいから、なんとなく伊勢神宮が連想された。環境のすがすがしがさうおも

のばすことはできない。それは何故かというと、クレムリンを中心に三〇キロ以上は許可証が必要であつたからである。もしも許可証を持たずに禁を犯すとスパイ容疑をかけられる。彼にはそれがわづらわしかった。

その後、昭和四十年六月にも、技術的な問題で再度モスクワへ社員を派しているが、そうした制度的事情はあまり変わっていないかたさうである。果たして現在はどうなっているか――



ウクライナホテルの前で

わせたのであろう。

このほか、はるけくも来たついでに、有名な建てる物だけでも見ておこうとボリショイ劇場、レーニン図書館、トレチャコフ美術館なども見物した。

モスクワでは堪能するまで観光の足を

ところで、訪ソの成果はどうであつたかというところ、かなり値ぎられはしたが、ステンレス弁の大量受注に成功することができた。いろいろ引き続き取り引きが続され、平田製の各種バルブは海を渡ってソ連に送り込まれている。

まず70万ドルの注文

社内には「ダビソン旋風」

英商社と代理店契約

平田バルブ工業は昭和三十八年七月、四回目の増資を行い、資本金は一、〇五〇万円となった。これより先、同年四月にシエトロ主催の工業展がロンドンとトロントで開かれ、平田の製品はそのいずれにも出品展示された。

ここにも輸出振興を念願とする平田次二の積極的な姿勢を見ることができ、その反響はすぐに現れた。ロンドンのダビソン商会から代理店契約を結びたいというのがそれである。しかし、このときはその申し出を見送っている。

実をいうとロンドンあたりに有力な代理店がほしいところであったが、ダビソン商会の実態がよくわからない。そこで十分に調査したうえで再考しようというのが彼の肚の中であった。

その結果、ミスターダビソンはユダヤ系の商人ではあるが、市場開拓は熱心でたいへんな頑張り屋であることがわかった。周囲の評判も悪くない。平田は意を決して代理店契約を結ぶことにした。昭和四十年六月のことである。

果せるかなダビソンの活躍は平田バル

ブ工業の社内に「ダビソン旋風」を巻き起こした。英国から同商会を通じて七〇万ドルという巨額の注文が舞いこんできたのだ。

そればかりではない。イラン、イラク、トルコなどへもプラントがゆく。いずれもミスターダビソンの働きであった。昭和四十二年には、その統計が一〇〇万ドルにものぼっている。

日本のバルブ業界がおどろいた。当時は不況期であったにもかかわらず、平田バルブは不景気などど吹く風であったからである。

だが、棚からボタ餅が落ちてきたという偶然ではない。それにはそれだけの理由があった。その一つは昭和四十一年四月にAPIすなわち米国石油協会から認定工場としての資格を許されていたことである。

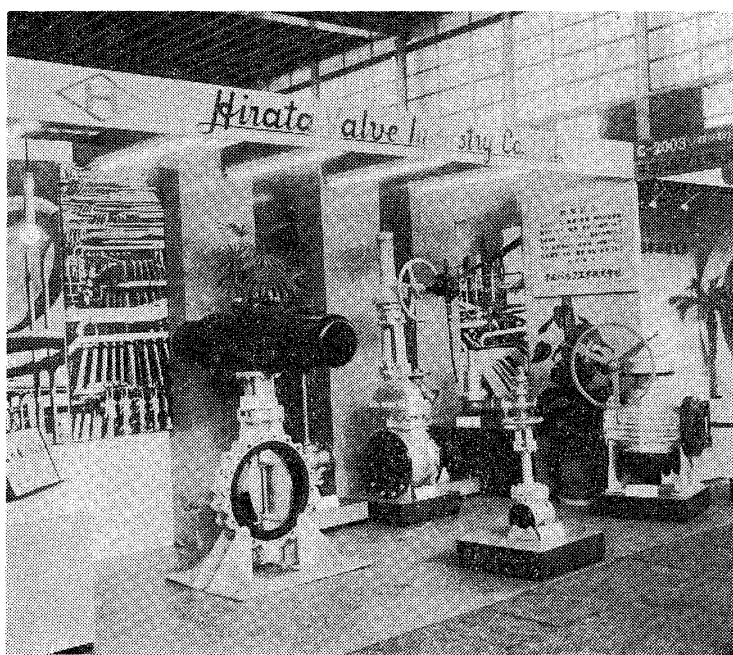
米国石油協会は、石油関係にかんする限り、世界最高の組織と権威をもつ団体であり、同協会で制定した石油精製用装置の機械類についての規格は、全世界の石油関係装置に採用されている。

それだけに認定工場の資格を取得するのには厳重な審査に合格しなければなら

ない。当時、日本のバルブ業界では平田のほかは二、三の会社があるだけであった。当然、内外の販路拡張に威力を発揮する。たとえば

・シエル石油、エッソ・スタンダード石油、イラク石油省、トルコ石油、ブリテ・イシユ・ペトロリウム、ナショナル・イラニアン石油、インベリアル・ケミカルズ・インダストリーズなどのほか、数

もう一つの理由として、通産省から「輸出貢献企業」の認定を受けていることを挙げねばならない。この認定をうけるためには日本バルブ工業会、日本機械輸出組合など関係工業団体や日本商工会議所の認定をまず取得しなければならない。平田バルブはこれにもパスした。昭和四十一年いらい毎年引き続き輸出貢献企業とされている。



展示場で人気呼ぶ各種バルブ

後年、平田次二は藍綬褒章を受章するが、それもたゆまぬ海外市場開拓の功によるものである。

以上のべてきたように「棚からボタ餅」は企業努力による賜ものであった。故なしとしない。

こえて昭和四十一年五月、平田次二は得意先を訪問する目的でイラン、トルコ、イギリスに出張するが、ロンドンでは

十社と直接取り引きを交わす端緒となっている。国内企業との結びつきは枚挙にいとまがないほどで、ここでは割愛する。

ついうっかりと思わざる失敗を演じてしまう。

輸出への足がかり

石油設備を見て回る

テヘランに飛ぶ

イランは有名な産油国でクウェート、サウジアラビアにつき中近東地域では第三位を占め、石油産業がこの国の経済を支えている。

平田次二がイランを訪れた目的は、ナショナル、イラニアン石油会社をはじめ石油精製、石油化学会社の建設または計画がさかんであったので、イランのバルブ輸出を念願したからである。

イランの首都テヘランに着いたのは、現地時間で五月十一日夜十一時五十分であった。飛行場には深夜であるというのにニア・イースタン・エンジニアリング・コーポレーションのボゾルゲメ重役が出迎えてくれた。もっとも同社は平田バルブの代理店であったからである。

一行はテヘランの夜道を車でホテルに向かった。入浴したのち、その夜はすぐにベッドへもぐりこんだ。

翌朝、フロントで食堂をたずねると、六階だという。普通ホテルの食堂といえど一階か地下であるのに、奇異なことだと思った。ところが、それにはそれだけ

のワケがあったのである。

エレベーターに押し上げられて、六階の食堂に一步踏み入れたとき、彼は思わず目を見はった。海拔八七〇〇メートルとかいうエルブルズ連峰が頂上に雪をたたいた大景観に接したからであった。

彼は朝食をゆっくり楽しんだ。爽やかさ限りなしであった。ちかごろでこそ東京にもたくさん的高層ホテルができて、その最上階にスカイラウンジがお目見えしているが、なかなかその比ではない。

やがて午前九時をすこし回ったところにニア・イースタン・エンジニアリングのジアフアリ社長とボゾルゲメ重役が現われたので、さっそくナショナル・イラニアン石油会社へ案内してもらった。

石油会社の社長はいかにも金持ちの二世らしい品のいい青年であったから、愉快に商談をすすめることができた。おそらくいまは、押しも押されぬ実業家となっていることであろう。

午後は市内見物にでかけた。たくさんの人達で賑わっているバザール（市場）付近を車で通り過ぎたが、商店や道端に並べられた品物は、いづれもあり上等

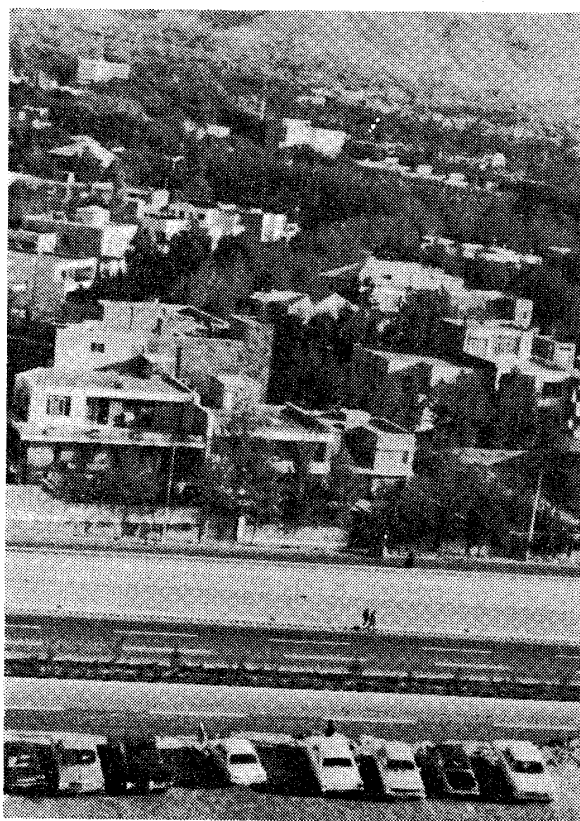
なものではなく、わざわざ車から降りて見るほどの感興もわかない。そうした風景から感じられたことは、貧富の差がかなりはげしいのではないか、という印象であった。

テヘランの女たちは、すでに廃止されたはずのチャールド（顔覆い）をいまだにつけたままで、いかにも神秘的な雰囲気をつたえだわっていた。

大急ぎで見物したのち、イラン石油会社を訪問した。その目的は儀礼的なもの

ソンが待っていた。彼の案内でシェル石油やブリティッシュ・ペトロリアム社を訪問し、日程は順調に消化されていた。ところが、ほとんどのスケジュールを終えた安堵からか、平田次二は大失敗をやらす。それはこうである。

彼はもともと酒をたしなまぬ。だが英国紳士であるユーザーたちから、食前酒としてブランドーやウイスキーをすすめられた。むげに断わっては礼を失うと考えた彼はそれを受けた。ちよつとイケ



テヘラン市の住宅街

ルではないか。

そこまではよかったが、帰りの車にはいあがつてようやく納まるという醜態をさらしてしまった。いまでもそのときのことを思い出すと、冷汗がでるという。

であったが、このときのイラン行で、さきゆき輸出の足がかりをつかむことができたのは、何よりであった。
インドでは暑さに僻易しただけで、別段これといった話はない。舞台をロンドンにまわそう。ここにはミスター・ダビ

韓国の将来を期待

四日間の駆け足視察

ソウルを訪問

昭和四十一年八月、平田バルブ工業は五回目の増資を行ない、資本金は千五百万円となった。そしてこの秋、平田次二は韓国へ出張している。単身であった。

韓国には首都ソウルを中心に多くの得意先があり、たとえば、大漢石油公社、漢国電力、忠州肥料、湖南精油、高麗遠洋漁業などがそれで、他に三十社ほどあった。

またソウルには平田バルブの代理店三聖商事がある。そこを足がかりとして、わずかに四日間に主だったユーザーを訪問しようというのだから、彼にとってはかなり忙しい旅であった。しかし、異国とはいえ、同種同文、どこでも日本語が通じたので、その点は気苦労をしなくてすんだ。

得意先回りを済ませてしまうと、彼の手許にたくさん名刺が残った。ほとんどが漢字を用いた日本風なもので、彼としては朴が「パク」であり、金が「キム」であるといったあちらふうな味び方を記憶すればよかったわけである。

ところが二年後に再び韓国を訪れたと

きには、それがすっかり韓国文字のものに変わっていたのにおどろいた。そのかわり裏面には英語で印刷してあった。それを頼りにしなければ、誰からももらった名刺であるのか、まったくわからなかった。

変わったといえば、物価も二倍以上にハネあがっていた。それというのも韓国は兵隊の数が多く、当時すでに六十万を保有し、世界第四位の軍備といわれていた。そのために国家予算のうち三分の一は軍事費に食われているという状態であった。

また韓国は北が工業、南が農業とされていたが、国が南北二つに分かれてからは農業国としての韓国が残った。そこで近年は京仁総合開発が実施され、ソウル―仁川間を重工業地帯化する建設工事がさかんに進められているが、彼が訪問した当時はまだ一般に目を見張るような企業はあまりなかった。

そのため失業者の数も二百五十万―三百万といわれ、こどもたちがホテルの前で旅行者に小銭をせびるという光景も目撃され、日本の終戦直後を思わせるものがあった。

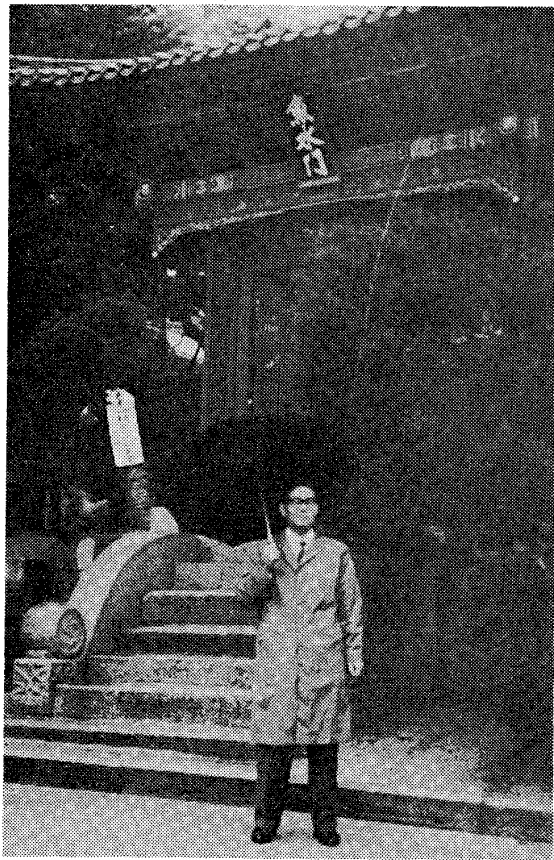
彼は市場調査や所要をすませたあと、残されたわずかな時間を利用して、ソウル市の内外を駆け足で見物した。ソウル第一の繁華街南大門を中心に、太平路などのメインストリートが走り、その沿線上にホテルや銀行、一流商社が並んでいる。

李朝の旧王宮であった景福宮をそのまま使っている中央政庁、それに国会、美術館、国立劇場などを見してから、彼は郊外のウォーカーヒルに車をはせた。

た。午後はいくくと雨になった。彼が傘をかかげて立っているところは、ソウルのもつ秘苑の前。「魚水門」という額のかかった小門は、異色の建築様式で知られている。

つまり、屋根全体がわずかに二本の柱で支えられていながら、完全に均整がとれていて、バランスもしっかりしているということであった。

四日間の韓国視察で彼が感じとったことは、一つの国が主権を回復し、独立を



秋雨けふる魚水門前で

ここは漢江の流れを望む風光明媚の地で、その名が示すとおりアメリカ駐留軍の保養施設が中心。夏になるとオリンピック・サイズの屋外プール周辺にビーチ

・パラソルの花がひらくソウルの名所の一つ。彼が行ったときは季節が秋であったから、丘は一面に紅葉して美しかった。

かち取ったにしても、真の独立国家として歩む道は、きびしくけわしいということであった。

しかし、四日間に会った人たちがそれぞれの真剣な態度や、韓国の持つ人的資源を考えると、やっぱり将来に期待しないわけにはいかなかった。

資格審査に合格

原子力発電用バルブ

研究の成果あがる

近年、わが国は飛躍的な経済発展と、国民生活水準の著しい向上にとともに、電力消費量は逐年増加の一途をたどり、ついに米ソに次ぐ世界第三位の発電国となっている。

この盛んな電力需要に促進されて、火力発電技術は急速に発展し「火主水従」の傾向へと急角度に傾斜しつつあるのが現状である。

しかし石油、天然ガスなどのエネルギー資源に乏しいこの国においては、環境汚染などの関係からも、しだいに火力の中でも原子力発電に依存してゆく度合いが深まっている。

そして現在、四カ所で原子力発電所が営業運転されているほか、各地で相次ぎその建設が推進されているわけだが、ほとんど全ての発電所はGEによる沸騰水

形原子炉あるいはウエスチングハウスによる加圧水形原子炉が採用されている。

これら原子炉の将来の方向としては、一九七五年以後の実用化を目標としたA

・T・R (advanced thermal reactor) 重水減速沸騰軽水冷却形が、核燃料開発

事業団により開発が計画されており、また一方では核燃料資源の有効な利用を推進するためF・B・R (fast water reactor) 高速中性子増殖炉の開発が強調されている。

ここでは学問的あるいは専門技術的なことをのべるのが目的ではないから詳細は割愛するが、要するに原子力発電用に使われるバルブは、事故の危険度が大きく、長期連続運転を必要とするので、耐久性については設計寿命三十一四十年とされ、垂直、水平両方向の地震荷重などの検討も要求されているということである。

いうならば原子力発電用バルブは絶対に事故は許されず、そのために最高度の品質が保証され、管理されなければならない。平田バルブ工業がこの研究と試作に乗り出したのは昭和四十年からである。

まず、研究資料がある。それをアメリカ・ソサエティ・オブ・メカニカル・エンジニアに求めた。この会員になるとさまざまな研究資料を入手する便宜があったからである。

しかし、誰でもが会員となれるわけではなく、厳重な資格審査に合格しなければ

ばならない。平田バルブのばあいは取締役のひとりである平田公一を会員として申請した。

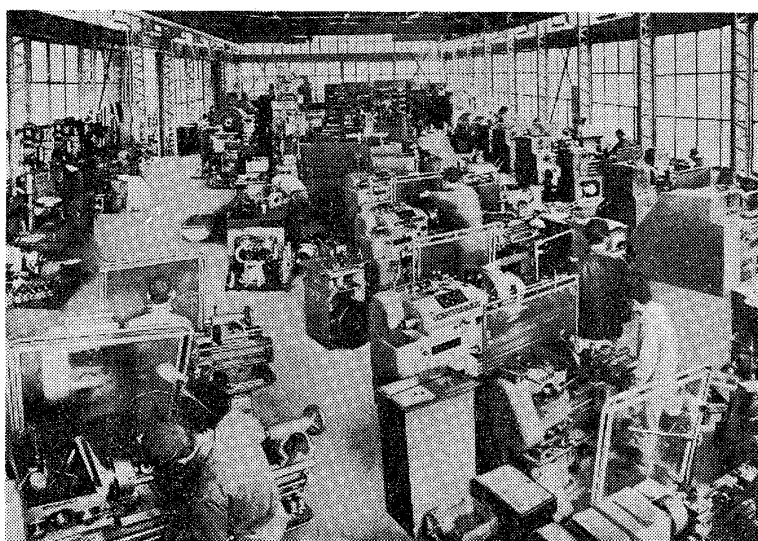
そのときにはエッソ・スタンダードとケログ社のチーフ技術者（いずれも東京駐在）の推薦状、それにアラムコと平田公一の母校である慶応大学の教授から

研さん試作をかさねるうち、早くも四十二年八月には三井物産電力部と東芝から引き合いを受けるほどに研究の成果をあげていた。

こうした研究の中で注目されるものの一つに、主蒸気緊急遮断弁がある。これは主としてパワープラントの主蒸気系水平配管に取り付けられるバルブで、原子力発電用としては、燃料格納容器貫通部の前後に二台直列に装着される。

このバルブの働きは、バルブの下流側の主蒸気ラインが破損したようなとき、管路を急速に閉塞して、事故の拡大をストップしてしまうことだ。閉塞時間は一・五秒から六〇秒の間を自由に調整できる。それがミソである。

現在までに平田バルブの製品は東海原子力発電所、敦賀原子力発電所、福島原子力発電所、動力炉核燃料開発事業団東海事業所などのほか原子力船「むつ」にも納入されているが、海外の原子力発電所、



平田バルブの機械工場（一部）

原子力研究所からも引き合いや注文が舞い込んでいる。

それというのも長年の研究開発と、苦難の実績が実を結んで、完全ノーリークの原子力用バルブが完成を見たからである。

一目瞭然の“索引”

実用書として高い評価

豪華英文カタログ

平田バルブ工業が英文による総合カタログの編集に着手したのは、昭和四十二年三月のことである。いらい二年半の歳月と一千五百万円の巨費を費やして、苦心の結晶五千部が完成した。この国のバルブ業界としては最初のもので、画期的な出版とされている。

原稿の校閲はロンドンとロサンゼルス
のバルブ技術者に依頼して、完璧なもの
とした。外国向けの見積もり書はすべて
英文なので、日本的英文の不備を除くた
めである。

校閲という作業は白毛を抜くようなも
ので、きれいに抜き取ったつもりでも、
どこかに一本か二本かのこる。ましてや
英文の校閲ともなればなおさらのことだ
がある。

そのために技術的知識のゆたかな外人
に依頼したわけで、発案者平田次二の自
慢のタネとなっている。一般の訳書でも
これだけの手数をかけたものはすくな
い。

完成した英文カタログ五千部のうち、
大半の四千部は海外のユーザーに贈られ

た。残部は国内の得意先と機械科をもつ
各大学に贈呈した。したがって平田の手
許にほとんど残されていない。

これを手にしたところでは、いずれも
珍重した。おかげで平田からの求人にな
いしては、大学の教授たちが熱心に尽力
してくれたほどである。

英文カタログの製作費は一部三千円と
なっている。高くついた。だが、プレゼ
ントしたときには歓声をもって迎えられ
ているので、平田次二としては満足して
いる。

もともと彼はPRに強い関心をもって
いたから、この着想がうまれた。それと
いうのも片々たるカタログでは、大方が
紙屑カゴに没してしまう。ていねいに保
存されることができない。

それならば捨てられないものを作って
やろう。そうするにはユーザーの座右か
ら手放せない有用性がなければならぬ。
あれこれ思案のすえ、豪華英文カタログ
となったわけである。

これならば書架に収められても、紙屑
カゴへ葬られる心配はない。それだけの
内容を持っているからである。一例をあ
げよう。

海外の大手バルブ・メーカーはどこで
も辞書のようなカタログを発行してい
る。現に平田の書架にもそれらが数多く、
実用書として並んでいる。

ところが、いざ必要なバルブを求めよ
うとすると、部厚いページを繰って探す
煩瑣に耐えなければならない。この面倒



PRにも役立つ英文カタログ

実はこの索引を作製するために二年半
歳の大半をついやしているわけで、その
努力が同書の価値を高いものにした。た
とえば年産四億ドルという世界最大のバ
ルブ・メーカーであるクレン社（米）を
はじめチャップマン（英）ランケンヘー
マー（米）シンキンス（同）パシフィッ
ク（同）O・C（同）パ
ウエル（同）R・P・&
C（同）セーラー（伊）トラ
イアングル（英）など目
ぼしいところはすべて網
羅され、ありとあらゆる
バルブを瞬時にして眼前
に求めることができる。

こうした索引は平田の
カタログのほかにない。
い。ミソというわけであ
る。この反響はたちまち
現われて、思わぬところ
から注文が舞い込んでき
ているという。平田のバ
ルブが日本におけるより
も海外に知られているの
も故なしとしない。

平田次二はいう。「わ
が社のカタログは、海外
でセールスマンの役割り
を果たしている」と。事実、この英文カ
タログが全世界に配布されたことによっ
て、平田バルブ工業は実質以上にイメー
ジ・アップされている。

招待客300人が揃う

川崎新工場、全階を開放

創立30周年の記念式典

さきにも触れたように、平田バルブ工業の川崎工場が五階建てビルの完成を最後に、初期計画工事を終えたのは昭和四十二年六月のことである。たまたま、その年が創立三十周年にあたっていたので、新築の全階を開放して記念式典が行なわれている。

おもえば昭和十二年六月十日、東京・新橋の一隅にほとんど無資本と云っていい平田商店を個人で興し、いろいろ営々として三十年、平田次二にしてみれば感無量なものがあつたにちがいない。

式典の最後には永年勤続者の表彰が行なわれ、そののち祝賀パーティとなった。招待客三百名、日ごろ恩顧のユーザーを中心に官庁関係、金融関係、協力メンバーなどが顔を揃えてグラスをあげた。

午後四時からは社員、従業員全員を招き、過ぎしこし方の思い出話に花を咲かせ、川崎・溝の口の夜空に星が冴えるまで歓談歓語にさざめく。彼らにしても、あすからの職場に五層楼のビルができたので、二重のよろこびであつたらう。創業時にはわずか二人の従業員しかいなかった。

ったのだが――

三十年という間にさまざまなことがあつた。創業当初は鉛管、パイプ、バルブ、継ぎ手などを商い、主な得意先は付帯設備業者であつた。

ところがその大半は個人経営で、月末の集金が悪く、資金繰りに悩んだすえ、遠方の親戚へ飛行機で借金の申し入れにかけたことがある。そのとき、相手から

「いや、よく来た。仕事の方はうまくいってるそうだね」

と、機先を制され、借金のことを口にするわけもいかず、手ぶらで帰った。飛行機を利用する金が惜しくて、帰路は汽車に乗ったが、その汽車のおそいこと、尻を押したくなるほどだった。

その月はずいぶん仕入先の支払いができず、無理に頼んで一カ月待ってもらったが、主家にいたころの信用は自分一人になると、十分の一ぐらいになってしまうものだとつくづく経験した。

独立後、このような状態が二、三年続いたが、誠心誠意をもって支払いにつとめたので、しだいに信用をえることができた。それと並行して平田の知名度を高

めるために、最初はハガキ、つぎはパンフレット、さらにカタログで宣伝した。

そのうち支那事変がはじまり、物価統制令が公布されると、それとは裏腹に物価は上昇するばかりで、材料の入手が極度に困難となり、いわゆるヤミ値が横行した。

価格よりも高いものを書き出して提出させられたこともある。

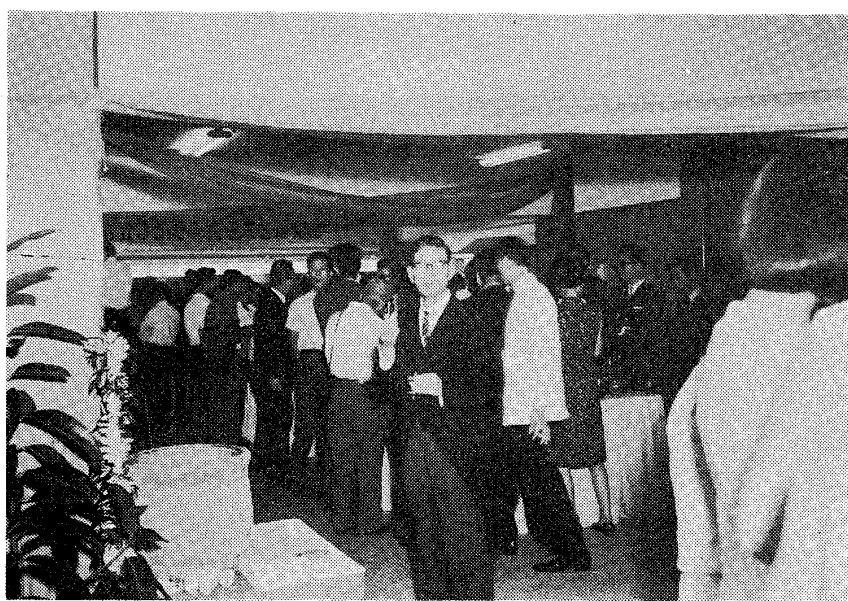
また、砲金バルブの資材に電気銅の軍需支給票を鋳物工場に支給したところ、その工場がヤミ値で放出したことが露頭し、需給元である平田が九段の憲兵隊に呼び出され、朝から深夜までヤミがでるほど絞られた。そのとき彼は、憲兵隊というところが、きびしく横柄なものであることをつくづく思う。

空襲で新橋の本社が焼けた日、彼は駒沢から自転車通勤したが、途中の三軒茶屋から新橋までの間に数人の焼死体を目撃している。本社の焼跡前にも一人の焼死体が見つかった。

それを町内の処理班の車に運び、両手を合わせて冥福を祈ったこともある。ともかく起伏の多い歳月であつた。

平田商店もヤミ値でなければ商売がやっていたい。そのためずいぶん気を配ったが、とうとう愛宕警察署から出頭を求められ、一週間ほどもかかって、公定

業では例年六月十日を創業記念日として午後三時には一斉に終業、全従業員に酒肴、永年勤続者には記念品を贈って祝意を表している。



創立30周年パーティの平田社長

石油の施設を見学

首都は赤道直下の高地

コロンビアへ飛ぶ

昭和四十三年三月、日本機械輸出組合は「バルブ・コック中南米市場調査団」を派遣しているが、このときの団長は平田次二。行程はメキシコ、コロンビア、ペルー、アルゼンチン、ブラジル、ベネズエラなど六カ国を訪問し、帰路はロサンゼルスを経て東京にかえっている。およそ一カ月の旅であった。

調査の目的は①輸入状況および流通形態②競合国の進出状況③各種プロジェクト建設計画の実態（特に石油化学プラント関係）④有力コンサルタントのあり方（技術者および顧問技術会社）⑤その他参考となる事項。

一行は三月九日に空路東京を発ち、翌日メキシコシティに到着し、輸出組合のバルブ分科会のメンバーである現地三井物産の案内でまず日本大使館に向かい、詳細に事情を聞いたのち、メキシコ石油（ペメックス）を訪れている。ペメックスは採油からスタンド販売まですべて国営という特異な存在であった。このほか有力企業、主要輸出入商社などを歴訪しているが、メキシコでは国産奨励と

いう意味あいから、国内で生産されるものは、すべてにわたって輸入禁止とされていた。

平田次二にとってメキシコは曾遊の地。前稿でも触れているのでコロンビアへ飛ぶ。ここでは首都ボゴタを中心に大使館、コロンビア石油、リッチモンド石油、ケロッグ社などの施設を見学している。ジェットロの案内であった。ボゴタは海拔二七〇〇メートルという高地にある赤道直下の町。空港に着いても三十分間は休憩しないと目まいがする。この人たちは日本人よりも小柄で皮膚の色も黒い。

コロンビアはコーヒーの産出国として世界的に知られている。さっそく飲んでみるとココアのように濃い。だが酒をたしなまぬ彼には「うまい」と感じられた。

また、この国では鶏の丸焼きがご馳走で、大皿の上にどかんと一羽ごととせてくる。それが一人前だ。とても食べきれるものではない。ともかくそれをビニールの手袋をして、むしりながらたべる。味は珍重すべき美味であった。

陶業もさかんで特産品となっている。余談ながら松下電器の社員が、陶業界に

君臨する財閥会社社長の娘と結婚し、以後現地人として幸福な生活をしているという話を聞かされた。

このような話は南米の旅中、たくさんあった。その理由の一つは、現地で結婚すると給料が倍になることである。それに欧州系の美人が多かったのも無縁では

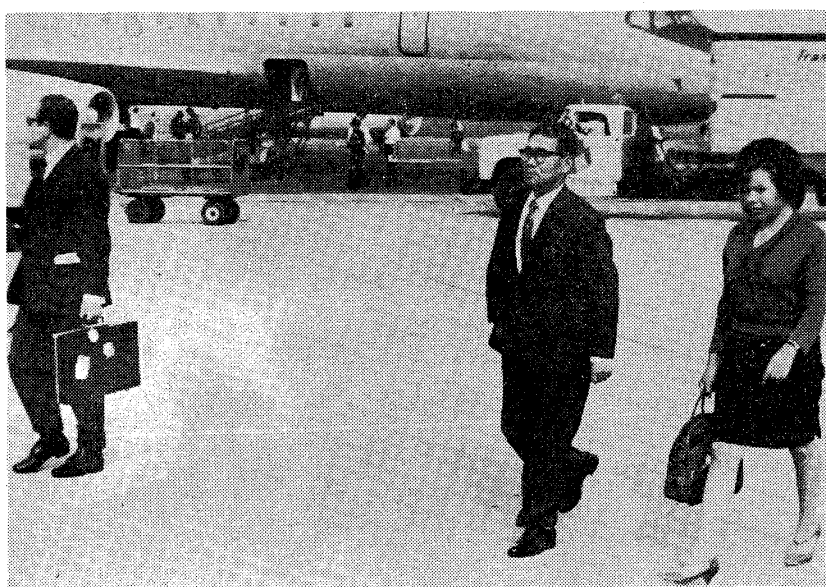
人が住んでいる。にもかかわらず現地人とのトラブルはほとんど聞かれないという。

平田次二が昭和三十五年に初めてメキシコへの旅にでたときは、飛行機の中で「チャイナか」ときかれたが、中南米の旅では「ようこそ、ジャポン」と先方から寄ってきた。それだけ日本の印象がよくなっていた。

もう一つ、コロンビアについて語っておきたいことはエメラルドだ。もちろん産出量は世界一、したがってこの宝石の価格は日本の十分の一でいどであった。日本の婦人たちにとっては羨しいはなし。

だが油断は禁物、観光客と見るとニセモノをつかまされる危険がある。彼はその危険を避けるために、現地ジェットロの人と同行して、美津子夫人のために一個を購っている。

彼ら一行が同国を訪れたときにはブラジルとベネズエラの国境近くに一大油脈が発見された。おそらくはベネズエラの油脈が国境を越えたものであろうといわれていた。



メキシコシティー空港での平田社長

なかったようだ。

南米全域にわたって、日本人の評判は悪くない。ことにサンパウロには東京・世田谷区の人口に匹敵する日本人町があり、ペルーの首都リマにも五万人の日本

河崎大使が歓迎

ラプラタ精油を見学

アルゼンチンへ

コロンビアをあとにした調査団の一行は、三月十六日ペルーの首都リマに着く。一行の資格は通産省の囑託とされていたので、空港には日本の外務省から連絡をうけた人たちが出迎えてくれた。そのうえ、現地での手配は日商岩井が済ませてくれたので、まったく不自由を感じなかった。

ここでは日本大使館をはじめE・P・F（国庫石油会社）インターナショナル石油のほか、主要輸出入商社を訪問して五日間滞在する。

その間、各商社会社との懇談会、大使公邸での晩さん会などが催され、日程は快適に消化されていた。当時の特命全権大使は粕谷孝夫であった。

ペルーはインカ帝国の故地、日本人移民はブラジルについて多いところ。住民の五〇％弱が原住民のインディオ。インディオと白人の混血が四〇％、残りが白人となっている。

漁業がさかんで漁獲量は世界屈指。首都リマの町中でも漁臭がブんとくる。ほとんどが肥料にされていた。

さきにも触れたようにリマには五万人の日本人町がある。どういうわけか沖繩の出身者が圧倒的に多かった。一行は町中にある日本人会館で懇談会を持ったが、バルブ工業にかんする限り見るべきものがないことがわかった。

リマの市街は高層な建て物が櫛比していて美しい。だが、ひとたび目を郊外に移すと、そこには屋根のないレンガ囲いだけの家屋が目立つ。屋根がないのはこの国に雨季というものがないからであるが、貧富の差がはげしいことは一目瞭然であった。

ペルーの国土は太平洋に沿って南北に延びているが、海岸平野の東方にはアンデス山脈が縦貫して、リマの住民たちはそこから水を引いて暮らしている。

一行は郊外の精油所などを見学したのち、三月十五日にはこの地を離れ、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに向かった。

アンデスの山を越えると、あたり一面は牧場と牛ばかりが目につく。それもそのはず、アルゼンチンは世界一を誇る牛の産地だ。雨量も多く緑も滴るように濃い。滞在中は分厚いビフテキと臓物の焼

き料理をふんだんに食べさせられた。さすがにうまい。

ブエノスアイレスは「南米のヨーロッパ」といわれるだけあって、欧州各国から多くの人たちが集まっており、建て物のほとんども欧風であった。いうまでもなくアルゼンチンタンゴはこの国が発祥。

大使館主催の晩さん会には河崎一郎大使も出席して、平田次二を団長とする一行をここから歓迎してくれた。この日

たからであった。

なるほど著書の内容はきびしい。たとえば「日本の政府首脳にはリーダーシップがない」「政治家は官僚と圧力団体のブローカー。ワイロと脅迫で地位を確保している」「日本人はホットテントやピグミーより魅力がない」と、手きびしい。

だが平田次二が大使公邸で晩さんを共にしたときの印象は、きびしい性格の一面は感じられたが、いかにも重厚な人柄



ペルーの民族衣装

がちょうど三月二十日。

奇しくもその日から満一年後の三月二十八日は、河崎アルゼンチン大使が解任された日に当たる。現職の大使としては初めての出来事である。それというのも同大使の著書「ジャパン・アンマスクト」（日本の素顔）が政府首脳の忌諱に触れ

であった。これは余談。

一行は伊藤忠が元請けをし、日本揮発油が建設したラプラタの精油所を見学したのち、原地の案内役を買ってくれた東洋棉花（現トーマン）、ジェットロに感謝して、ブラジルのサンパウロへと飛び立つ。

特殊バルブに需要

技術提携考慮の時期

ブラジルを視察

サンパウロは七五〇メートルの高原にあり「日本の軽井沢」といわれ、在ブラジルの日本商社はほとんどここに本社を置いている。たとえば丸紅飯田ブラジル会社、伯国三井物産、兼松ブラジル有限会社などがそれである。気候温和でコーヒー産地の中心地であるほか繊維、製鉄自動車、機械などの工業もさかんで、日本企業もかなり進出している。

さすがにブラジル第一の都市だけあってサンジョアン大通りには摩天楼が林立し、壮大な眺めであった。住民はイタリア、ポルトガル、日本など各国からの移民が多く、そのうち日系は六十万人、日本語新聞まで発行されている。

日本人町には「すし」や「おでん」のほかに納豆、豆腐まであったが、日本で食べるときはいくらか味が違っていた。いうならばブラジル風であった。ここには現地日本人による商工会議所も設けられている。

中南米各地を歩いて目立つものはナショナルとソニーのネオンだ。いたるところに代理店、販売店がおかれていた。一

行は例によって領事館を訪問し、ブラジル石油など有力企業をたずねている。ここの東道役は主として丸紅がやってくれた。

ブラジルのバルブ産業は約六十社、そのうち大手は十社ほどであるが、そのほとんどは欧米のメーカーと技術提携あるいは合併会社の形をとって、国産化体制を整えつつあった。

最近では一〇〇%近く国産できるようになり、輸入は高関税で押える方針をとっているようだ。しかし、石油精製、石油化学、天然ガス開発などによって、特殊バルブにたいする追加需要もでているので、これらは輸入にまたねばならぬ状況におかれている。

そこで、日本のバルブ業界としては、積極策として技術提携（パーツ輸出あるいは企業進出）を真剣に考慮しなければならぬ時期にあるとされている。

一行はサンパウロからリオデジャネイロへ回る。かつてはブラジルの首都であった。港も湾口にボン・デ・アスカル山がそびえ、風光明媚の美港として知られている。この市の南東部にあって、大西洋沿いに大きな弓なりの砂浜を持つコバ

カパーナ海岸は、保養と海水浴で有名な世界的観光地。到着した三月末には、早くも波乗りなどに興ずる人たちにぎわっていた。

また、海岸に沿って多数のホテルが軒をつらね、百万ドルの夜景をたのしむことができた。リオの町にも水着姿で歩く



世界的観光地コバカパーナ海岸

にゆく。こうした風習はまだ日本にはないので、めずらしいものにおもえた。

ここでも日本の企業は活発な動きを示していたが、ことに三菱系の発展が目立ち、石川島播磨造船所も進出していた。最後の視察予定地であるベネズエラのカラスに到着したのは三月三十一日。さ

すがに石油資源の豊かな国だけあって、大金持ちが多い。そのかわり物価が高いのにおどろいた。

ベネズエラの石油をねらって、国際資本系列の石油会社十指にあまるほど進出していた。日本揮発油の精製工場もここにある。マラカイボ湖には石油のヤグラが林立し、ベネズエラならではの異風景を展開していた。

めずらしいことにはバルブメーカーが一社もなかった。すべては海外からの輸入にたよっていた。それだけに企業の進出は大歓迎、そのうえ金融面での優遇措置までしてくれる。輸入は

主としてアメリカから仰いでいたが価格は一般に日本よりも高い。いうならば日本にとって処女地だ。調査団一行は、たがいにならずきあって、帰国した。

人たちが散見され、開放的で明るい印象をうけた。

だが、暑くて湿気が多かったのには閉口した。リオの町のひとたちは、一週間

に一度、家族そろってレストランへ食事

原子力バルブ受注

GEのサーベイに合格

土曜の半日制実施

平田バルブ工業がゼネラル・エレクトリック社（GE）のプラント・サーベイにパスしたのは昭和四十三年四月のことである。これに合格するためには執拗とおもわれるほどの調査をうける。

まず、経営者が原子力バルブをつくることに、どの程度の意欲をもっているかが質問される。GEからの質問書はもちろん英文、それに英文をもって答える。

つぎに、GEの発注する仕様書どおりに製品化することが出来るかどうかが問題となる。そのため工場施設と管理者の能力が事前に調査される。

だいたい以上のような書類審査が通過すると、こんどは改めてGE本社から技術者が一人と、東京支社からも日本人技術者が付き添って、実地検分にやってくる。

この検分にだいたい一カ月かかる。二人がかりであるから、延べ日数にすると六十日というわけである。

平田バルブ工業のばあいは、さいわい工作、研究、検査などの施設はすべて合格し、QC（品質管理）も万全とあつ

て、GEの条件に満足を与えることができた。

こうしたきびしい経過があつてプラント・サーベイにパスすると、GEの関係する各大企業にたいして「平田製のバルブを使用してよろしい」という通達が行なわれる。

その結果、平田バルブ工業は東芝グループ、石川島播磨、荏原製作所、オルガノの各社から総額にして二億二千万円にのぼる原子力バルブの注文を受けるという成果をあげている。

この時点でGEのサーベイに合格していた同業といえは門司の岡野バルブ製造、尼崎の東亜バルブ、それに大阪の和田特殊製鋼の三社があつただけで、東京では平田バルブ工業一社にすぎなかった。それだけに本社を東京にもつ大企業から、独占的に受注するという有利性があつたわけである。

さて、翌四十四年の四月、かねて懸案となつていた土曜日の就業時間を半日制に踏み切っている。それまでは午後三時が土曜日の定時とされていた。

こうした制度の変更は、社内各セクションの幹事が集まって大体の意見をまと

め、その結果を社長が決裁する。平田次二としては、土曜半体制を効率的とは考えていなかった。むしろ隔週全体制を採りたかつたが、営業関係とのつり合いから、あえて断行した。

現在、同社の従業員数は百八十四名、そのうち女子が四十二名ふくまれてい

ることのない本社と工場勤務者の親睦にある。この旅行には特別な事情がないから、社長も同行する。

彼はがんらい酒が飲めない。いくら飲めるように努力してみても駄目だったという。宴席では女子社員たちの仲間に立ちまじってコラなどで飲を共にする。

一人当たりの費用は土産代をふくめてざつと一万円。プランは社内旅行委員会で練る。昨秋は房州白浜が選ばれている。

このほかの年中行事としては春秋二回の野球大会を催す。社長の始球でブレイボール。優勝チームには優勝旗とトロフィーが授与される。

ボウリング大会も土曜日の半休を利用して賑やかに行なわれる。これにも社長は参加する。若い人たちにまじって一〇〇は出すそうだ。

海の家、山の家は六万人の加入者をもつ東京管工事健保組合の施設に依存していて不自由はない。こうした雰囲気の中で、平田次二は社員たちの仲人を二十組ほどもつとめている。まずは平和な会社である。



溝ノ口工場の設計部門

る。この全員を年一回、会社が全額を負担して行楽地あるいは温泉へ招待してレクリエーション行事としている。その目的の一つは、常日ごろあまり顔を合わせ

団長に平田社長

間一髪、ハイジャックにも

中近東北ア市場調査

昭和四十五年十月日本機械輸出組合は「バルブ中近東北アフリカ調査団」を編成した。一行は団長に平田次二、以下団員として高見沢昭吾（高見沢工機・取締役総務部長）石川洋一（北村バルブ製造・輸出課長）平野哲一郎（日本機械輸出組合・重機械部第二課長）らであった。

翌十一月四日、調査団一行は空路東京を飛びたち、十一時間後にテヘランに着、ここに九日まで滞在してつぎの目的地クウェートに出発しようとしたとき、思わざるアクシデントに遭遇した。

一行の乗る飛行機は午前八時に空港を離陸する予定であったが、どうしたわけか飛行機がありながら飛びたとうとしない。乗客たちを待たせたまま一時間が過ぎ、二時間が過ぎ、やがて午前十時半になった。

このときはじめて午前七時発の前便がハイジャックにあったことがアナウンスされた。一瞬、乗客たちはだれもかれも汁が一時に冷えたような表情となり、その中には、げっ、とトカゲでも吞んでしまったような顔もあった。

やがて、つきつめるような急ぎかたで警官がやってくる。航空会社の係員もやってくる。軍隊までが靴を鳴らしてやってきて、にわかにもものしい空気となった。

彼らがやってきたのは、乗客たちの身体検査をするためであった。金属探知器などを備えた五つのセクションを通過すること、一人一人をムチでたたくような検査を終わったが、そのときには全部の旅行者が手荷物を一時とりあげられていた。

日本のことわざに「泥棒を捕えてから縄をなう」という言葉がある。テヘランでの光景はそれを絵にかいたようなものであった。ともかく一行は、アラブゲリラのとばかりをびっしりと浴びたわけである。荷物はクウェートで渡された。

一行のご難はそれだけで済まなかった。クウェートからサウジアラビアへ入国するには検便証明書が必要だという。平田次二はそのことを日本出発以前に聞かされていたので、あらかじめ慈恵医大の証明書を用意しておいた。ところが入国前日の証明でなければダ

メだと断わられた。ならばクウェートで証明してもらおうとしたが、これもダメ。結局、ペイルートの国立病院へ行つて五ドル支払い、ようやく検便証明書を手にすることができた。しかも病院では検便をするわけでもなく、きわめて事務的な手続きだけであった。莫迦な話であ

がたつ。その日そのままペイルートへ泊して、翌日サウジアラビアのダーランへいった。ここにはアラムコの精油所があり、一行はそこを見学した。当時、中近東は国と国との紛争が微妙にからみあって、時には予定のコースを変えなければならなかったが、ここでは話が煩瑣になるのを避けるため述べない。ただ団長としての平田次二にとっては、心労の多い旅であった。



調査団一行の宿舎、ホテルアルジェ

調査団は十一月四日に出発していろいろ、二十三日に帰着するまで、石油産出国であるイラン、クウェート、サウジアラビア、リビア、アルジェリアの五カ国を歴訪している。

一行は石油および天然ガスパイプ輸送ライン、石油精製、石油化学工業に使用される工業用バルブを中心に調査を行ない、ことに各訪問先の国有石油会社と接触をもつことができた。平田調査

る。

クウェートからサウジアラビアまで飛行機で三十分、検便証明をとりペイルートまでは三時間、おもえばこれにも肚

団長は、そのことだけでも極めて有意義であったと述べている。

工業化の進展顕著

新しい市場成立しよう

バルブ調査団報告

「バルブ中近東北アフリカ調査団」の旅から戻った平田次二団長は、その模様をつぎのように報告しているが、ここでは総論的な部分だけをかいつまんでのべておく。

歴訪した五カ国（イラン、クウェート、サウジアラビア、リビア、アルジェリア）の一般的印象は、きわめて特異なものであった。その一つは、いずれも世界有数の石油、天然ガスの産出国であること。もう一つは、宗教の面でも回教国でこの二つの点で深い印象をうけた。

訪問各国の石油収入が、その国の経済発展に巨大で有効な資金を供給していたことも共通していた。例えば各国の年間石油収入はイランが約十億ドル、サウジアラビア、リビア、クウェートは大体七―八億ドルでいど、アルジェリアは将来天然ガスの供給設備が完成した暁には、石油収入もあわせて同じく七―八億ドルの収入が見込まれている。いずれにしても石油収入を無視してこれらの国の経済は語れない。

しかし、各国とも石油資源だけに頼る

ことから脱却しようとする姿勢がありありとうかがえた。その産業政策としては石油関連産業を軸として、工業化を推進していたことである。この面にかんするかぎり、発展途上国としてその規模は驚嘆すべきものがあつた。

経済成長率についていえば、工業分野におけるイランの一五％は別格としても、各国とも八一―一〇％の上昇を目ざしており、いずれも発展の様相を呈していることを実感した。

調査団一行が訪問したときは、ちょうど回教の祭りでもある「断食月」にあたり、日中は飲食、喫煙などいっさいを断つという、日本人の日常生活からみると隔絶した生活を約一カ月つづけるのであるが、印象に残ったことは、そのことよりも、テヘランから始まりアルジェに至る地域において、国民の全部が宗教的戒律を忠実に守っている事実と、その地域的広がりについて改めて考えさせられた。

中東の政治情勢は極めて複雑かつ流動的で、ときにはわれわれの理解をこえることもないではなかったが、政治経済の事情を異にしながらも、各国を結ぶ一本

の帯として回教という宗教的きずなの存在を、いまさらのように強く意識させられた。

インドネシアを含めた回教国諸国の石油は、世界の石油産出量の約四〇％近くを占め、その埋蔵量においては六八％に達するといわれ、現在から二十一世紀に



ベイルートの風景

することによって、それぞれ常識をこえた特異な一面をもつ国の性格を理解することができたことである。この実感は現地に立って見ないと、肌で感じることはできないが、ここでは一方法であることだけをのべておく。

さらに、訪問各国の工業化の軸として、石油関連産業の発展について触れたが、イラン、クウェートは他の訪問国とくらべ、工業化の進展がきわめて顕著であつた。その大部分はここ数年間に建設されたものであり、なお建設計画中あるいは建設途上のものを含めると、従来とは全く異なる新しい補修用バルブの市場が成立することを意味する。

また、これから建設が着手されるアルジェリア、サウジアラビア、リビアといった国々には、新規の需要がプロジェクトにもなっている補修用バルブの恒常的市場が将来は発生する。

したがって、訪問各国のバルブ市場はここ数年のうちに、大きな変容を来すことに、まず注目する必要がある。以上が平田報告の概要である。

かけてのエネルギー資源と、化学原料としての石油を考えると回教圏の重要性は想像に難くない。

第三点としては「石油」「宗教」「民族」という三つの視点をオーバーラップ

本領発揮これから

絶えず海外から引合い

不況に強い企業

ひとところ「アメリカが風邪ひけば、日本はクシャミする」といわれた。それほどアメリカに依存していたわけである。

ところが、そのアメリカがドル防衛の非常措置として、金交換停止と輸入課徴金一〇%を付加するというニクソン声明を出した。

まさしくアメリカがこじれた風邪をひきこんだわけで、日本はクシャミどころではないショックをうけた。ドル安円高となったので、世間はこれをドル・ショックと呼んだ。

ことに国内輸出産業はかなりの打撃をうけた。この要因はいうまでもなく、日本の生産力が恐れられたからにほかならない。したがってこれからは、量よりも質に転換して、良質商品を輸出するほかはない。

ところで平田バルブ工業は、昨年十月の時点で約六億円余の受注残をもっていた。それについてドル・ショックによる差損は約二百五十万円ていどだという。それでも現在、英国、オランダ、イタリア、韓国、台湾、ソ連、中南米諸国など

から割り合いに大口な注文が来ている。これまでも平田バルブ工業は不況に強い会社とされてきたが、平田次二の語るところによれば「本領発揮はこれから」としている。

その自信につながるものとして原子力・火力発電に用いる主蒸気緊急遮断弁、高温高圧に用いるスリース遠隔操作高速電動弁をはじめ、温度差のはげしいLNG用超低温弁、ことに油を嫌う酸素弁ほか石油化学、化学肥料、化学繊維、高圧ガス、海洋開発、公害防止、装置産業など高度の性能が要求される特殊作動バルブを持っているからである。

彼は不況という現実を姿勢を正しながらも、ひるむところがない。ことしはアラスカ、インドネシア、シンガポールなど原油の産出と工業発展途上国に調査の手をのびそうとしている。まかぬタネは生えぬというわけである。

数年前、平田バルブ工業は英文による総合カタログをつくり、そのうち大半の三千部を世界の有力企業に送っている。こんどの不況時にも絶えず海外から引き合いを受けているのも、その効果といえるだろう。

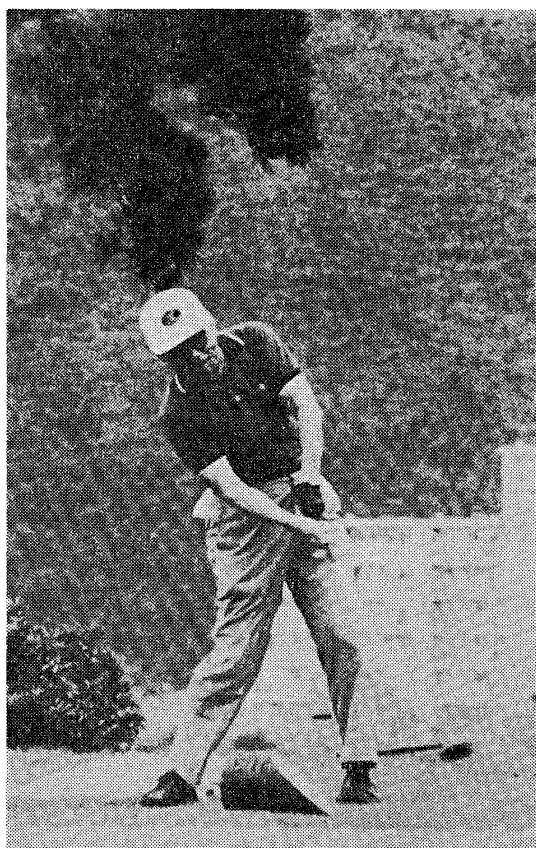
現今、たしかに輸出はむずかしい。だが彼はいささかも積極的な態度をくずしていない。たとえばこうである。

欧米一流のバルブメーカーにも不得手なものがある。これまでも彼はそのことをよく知っている。そこで、数のすくない、むずかしい特殊バルブで高性能なものをつくり、好採算をあげようとしているわけだ。

新技術で新製品の開発につとめることこそ、安定経営の道であると彼は信じて

た。このときには電動弁をふくむ十四点の製品を出陳して、新しい市場開拓につとめている。当然のように反響があった。ことしの第十回目も「さくら丸ジュニア」の船腹に納まって、平田製品は海を渡ってゆく。

同社が輸出に強いわけは他にもある。さかんに海外の工業展に製品を出品し、役員や社員を外国各地へ視察に派遣していることだ。彼自身は言うまでもない。たとえば最近では検査課長平野三郎を



ゴルフで英気を養う社長

いる。ともかく平田バルブ工業は、好況時とほとんど変わらぬほどの注文をうけて活況である。

産業巡航見本市船には第二回目から出品を欠かしたことがない。この船は隔年に出てゆく。前回は四十五年の十月に大洋州および東南アジアに向けて出航し

シンガポールへ、営業第一部長中村俊彦をモスクワへ、製造課長中村浩治を韓国のソウルへ出張させている。

また、役員としては営業本部長平田三男を米國、カナダへ三週間にわたって視察旅行に出すなど平田製バルブのPRに意欲的な動きをみせている。

藍綬褒章を受章

祝福される輸出振興

天皇から激励のお言葉

平田次二は昭和四十六年六月二日、満六十歳となり、めでたく還暦を迎えた。

創業いらい三十有余年、その労苦が髪の毛にいささかの白さを加えはしたが、相変わらずの元気であった。生きるかい多き人生を、ますます感じたにちがいない。

そのはつらつさを祝福するように、同じ六月二十八日には内閣総理大臣佐藤栄作から輸出振興功労者として個人表彰されている。

この日は第九回貿易記念日に当たり、個人表彰を受けた者は二十五名。この制度は昭和三十六年八月、輸出表彰制度に関する閣議決定によるもので、この国の輸出振興に寄与した個人および事業体について行なわれる。

これまでも述べてきたように、平田バルブ工業社長として、多年にわたる輸出積極策が政府の認めるところとなったわけである。

この榮譽につづいてさらに大きな榮譽をうけた。それは同年十月二十三日に藍綬褒章を受章したことである。

藍綬褒章とは明治十四年、褒章条例制

定によって設けられたもので、リボン（綬）が藍色であるところからそう呼ばれている。

この榮譽は教育、衛生、慈善、防疫の事業および学校、病院の建設、道路、河渠、堤防、橋梁の修築、田野の開墾、森林の栽培、水産の繁殖もしくは農商工業の発達について公衆の利益を興した者もしくはは公共の事務に尽力した者に授与される。

平田次二の場合は、永年にわたる業界の指導的立場にあって、海外市場の開拓をはじめとする輸出振興が政府によって高く評価されたことである。

褒章の伝達式は十一月十五日午前九時三十分から機械振興会館で行われ午後は受章者一同とともに参内し、天皇陛下に拝謁している。

彼は至近に天皇を拝し、励ましのお言葉をたまわったとき、くるぶしのあたりからわきあがってくる感激に、おもわず膝の力をうしないそうになったという。当日の藍綬褒章受章者は彼をふくめて九十七名であった。おそらく全員が忘我のよろこびをもったことであろう。

さて、この稿のしめくくり、話題を

転じて彼を語ることにする。

彼は小唄などのお座敷芸とはまったく無縁、囲碁将棋もやらない。唯一のたのしみは青天下のゴルフだけ。それに社員たちとの親睦のためにボウリングの球を投げるぐらいのものである。

だが、犬だけはこよなく愛する。創業いらい、犬のいない生活というものが彼の記憶にない。名犬もかなり育てたが、それを品評会に出すほどの犬キチともちがう。

彼は酒をたしなまないせいもあるが、

自家用の自動車運転手は、定時になるとかならず退社させる。運転手には運転手の家庭生活があり、そのリズムを狂わせたくないからである。

社外の役職も自分の仕事に専念するため、できるだけ辞退している。現在はずかに日本機械輸出組合の監事とバルブ工業会の役員を引き受けているにすぎない。

彼の事業年齢はなおたつぷりと残され

社は

使う立場になって

使いやすい親切な

高度のよい

バルブを作る

世間には、自分の家の犬は可愛がるが、

他所の犬はうっかりすると、棒切れでなぐりかねないという人もいないではない。ほんとうの愛犬家というものは、路傍で野良犬に尾を振られれば、おもわず

しゃがみこんで手をさしのべる 平田次

二はそのテイの犬好きである。

ているが、もし社長のイスを後継者に渡

すとしても、そのときはまた別の会社を興すという。仕事なしではいられないということであろう。いよいよもって仕事の虫である。

敬称略

発行所

東京都港区新橋四―九―十一

平田パルプ工業株式会社

編集責任者 岡田新作

